風のガンファイターと氷の狙撃手

シュツルム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＧＧＯ指折りのスナイパー『シノン』と、彼女の相棒である男の物語。

目次

BoB本大会前の一幕 ―― 1
GGO ―― 10
GGO その2 ―― 27
GGO その3 ―― 44
GGO その4 ―― 61
GGO その5 ―― 80
GGO その6 ―― 99
GGO その7 ―― 119
GGO その8 ―― 135

ＢｏＢ本大会前の一幕

あいつの事が知りたい？　確かにあんたと同じ本大会初出場だけど、ずいぶん喰い付くわね。違う？　あいつが知り合いに似てる気がする？

……あんた、リアルの詮索はマナー違反よ。え？　あいつのリアル知ってるのかって？

だからマナー違反……リアルじゃなくてＧＧＯの事？　ああ、ごめんなさい、早とちりだったわ。

そうね、あいつを一言で言うなら……『奇人』かしら。

あいつを最初に見た、というより戦ったのは、一時的に加入したスコードロンとの戦闘よ。過去にあいつにやられた、というか返り討ちにされたプレイヤーが一時的に組んで、私はその助っ人として参加したの。

なんで参加したのか？　……そうね、普段の私なら、そんなお礼参りみたいな真似をするスコードロンに入ろうとは思わないわ。けど集まってたプレイヤーが、それなりに名前が売れてた面々だったからよ。なのにわざわざ徒党を組む必要があるプレイヤー

に興味が出てね。
騙し討ち目的でスコードロンに誘われる例もあるけど、この時の私にそこまでの価値があるか、と問われたら『微妙』って答えられる程度だったから、早々に考えから外したわ。
「目標確認」
その時の私は、スナイパーとして指示された位置でターゲット、要はあいつね。あいつを待ち続けてたの。
『よし、射程に入ったら一発頼む。できたらそれで仕留めてくれ』
「……了解」
その時はムッとしたわね。私の腕を知ってて、『できたら』なんて言うんだから。
けどそれはそれ、私は撃ち殺すだけって自分に言い聞かせて、あいつが近づくのを待ったわ。射程に入って、引き金を引いた時も「当たった」って感触があった。けど
あいつ、その弾丸を避けたのよ。
「外した!!?」
状況的に予測線が見える筈ないから、後でなんであの時避けられたのか聞いたんだけ

ど、なんて答えたと思う？

【なんか嫌な予感がした】

よ。まあ実際大袈裟って呼べる位な避け方だったから嘘じゃないでしょうけど、その時の私はすごい顔してたわね、きっと。

「ごめんなさい、避けられたわ！」

『あいつだからな、責めねえよ。シノンはポイント移動、着き次第再狙撃だ』

「了解！」

すぐに銃を担いでその場を離れて、予測線が見えなくなるまでの時間稼ぎ。その間は他のメンバーの弾幕。二射目も避けられたら、そのまま援護が当初の予定。

当のあいつは、得物を抜いてこっちに向かって来てたわ。

「本当に、光学拳銃の二丁持ち」

光学銃はモンスター相手にこそ有効だけど、対人じゃフィールド装置のせいであまり役に立たないっていうのは話したわね。

あいつは基本Ｍｏｂ狩りをしてるから、光学銃自体はおかしくないわ。

問題は二丁拳銃。このゲームは予測円の中にランダムで着弾するから、二つ持てばそれぞれでタイミングを計らなきゃいけない。

そんな手間をかけるくらいなら、はじめから軽機関銃とかで弾をばら撒いた方が確

実。なのに、あいつは光学銃で二丁拳銃なんて地雷……とまでは言わないけど、戦い辛い方法やってたのよ。

もちろんメリットも無いわけじゃないわよ？　光学銃なら実弾銃に比べて命中率が良いから二丁拳銃もやりやすいし、銃二つだから単純計算でダメージ二倍。いる方向が全く違う複数ターゲットも狙える。

エネルギーパック……光学銃のマガジンね、これも小さいから嵩張らない上に大した重さじゃないから、二丁使っても十分な量が持てるし。ただ、それ以上にデメリットが大きすぎるのよ。

さっきも言ったけど、機関銃で済んじゃうし。しかも光学銃にもそういうタイプはあるし。おまけで光学機関銃もそこまで重く無いから、ＳＴＲにある程度割り振れば普通に二丁持てるわ。じゃあなんで拳銃使ってるのか？　ああ簡単よ。

【二丁拳銃の立ち回りってロマンないか？】

ですって。ＡＧＩ特化型のアタッカーは珍しくないし、光学銃装備のプレイヤーも普通にいる、二丁持ちは……かなり珍しいけど、いないわけじゃないわ。けど、全部合わせてそれをさらに煮詰めてトップクラスなんてあいつ位よ。堅実かなぐり捨てて、『ピーキー』より『ネタ』って言葉の方が似合うようなプレイスタイルなのに、理不尽よね。足を止めて重火力を撃ちまくるスタイルも考えてたらしいけど。

……話が脱線したわね。あいつが向かってきたから、当然メンバーも迎撃し始めたわ。

光学銃はプレイヤーには通じないのに、どうして逃げずに距離を詰めたのか？　ああ、言って無かったわね。防護フィールドの攻略というか無効方法は、大まかに２つあるの。

１つ目、実弾を用いること。これは言ったわね。

２つ目が距離を詰めること。

防護フィールドが光学銃を完全に防ぐのは、ある程度以上の距離から放たれた物。それが縮まる毎に能力が減衰して、最終的には無効。距離を詰めたことで予測円も小さくなるから、銃をあさっての方向に向けない限りは外す事は無くなるわね。

と言っても、無効になるのは光剣の間合いほどじゃなくても、相当に近い距離だから、まずその前に蜂の巣だけどね。

まあ、あいつもあんたと似た様な奴だったわけだけど。

私は移動中だったから、この時は見てなかったわ。代わりに通信でメンバーの悲鳴と銃声は聞こえてたけど。

『ちくしょう、相変わらず早え!?』
『嘆いてる暇あるなら撃ち続けろ！　牽制にはなる！』
『やってるっての！　でもこうも当たらねぇんじゃ叫びたくもなるだろ!?』
後から聞いた話だけど、この時は射線から外れる様に右に左にジグザグに移動してたらしいわ。平地だったからそれだけど、これで天井とか壁とか、まあ要は他に足を着けられる場所があると軽業（アクロバット）系スキルも相俟って縦横無尽に跳ねるみたいに来るわよ、昨日の予選映像みたいにね。

続けるわよ。ポイントまでもう少しって所で、通信から聞こえたのよ。
『やべえっ!?　散』
リーダーの焦る声と、それに被せる様に連続した光学銃の発射音が。こっちからメンバーに呼びかけても、何の応答も無いっていうおまけ付きでね。
ポイントに着いて直ぐに確認したけど、メンバーは誰もいなくなってたわ。
今まで横に動きながらだったのが、突然弾幕の中を真っ直ぐに突っ切ってきたんですって。それもさっきよりも速くね。
要は、加減した動きと速さにこっちの目を慣れさせて、そこから本領発揮ってこと。で、あっさり無効距離に詰められて、速射スキル込みの連射で纏めてジ・エンド。

迎撃してたメンバーが誰もいなくなったから、次のターゲットは私なのは自明の理よね。でもアイツの姿も見えなくて、数秒探しちゃったのよね。

後ろから音がして、咄嗟に動こうとしたんだけど、その前に頭に衝撃がきて私も死亡。勿論あいつの銃撃。

なんで私の居場所がバレたのか？　……メンバーの一人が、撃たれる前にポイントに視線向けたんですって。私がポイントに着いていて、援護してくれるって願望が出ちゃったのね。で、そこからは見えないだろうルートで行ってみたらドンピシャだった、らしいわ。

始めがこんな感じだったから、感想が「たぶん凄い奴」だったのよね。私は直接にあいつの戦い見てなかったから。

機会があって、あいつの戦いを直に見てからあいつは強いって確信したわ。詳細は省くけど、それから少ししてあいつと組むようになったのよ。前衛・後衛で分けられるし、組み続けられるくらいには相性も悪く無かったし。

あと、あいつ自身はＰＫは積極的じゃないけど、狙ってくる奴は多いから迎撃でＰｖＰも多くできたし。ＰＫ積極的じゃないかって？　さすがに襲ってくる奴は別よ。

剣は使ってないのか？　……少なくとも、私の前で使ってるのは見た事ないわ。

なに？　あいつが剣使わないのがそんなにおかしいの？

……はぁ。あんたがあいつを誰と重ねてるのか知らないけど、そんなに気になるなら直接訊けばいいじゃない。少なくとも、余程のことでなければ答えてくれる奴よ、あいつは。

……そう、躊躇う位余程のことなのね……なんで謝るのよ。聞かせてもらってるのに答えられないから？　あのね、あんたにも事情があるのはもうわかってるし、プライベートに関わる事でしょ？　ならこれ位じゃ怒らないわよ……そもそも、私には怒る資格ないしね。

ん、なんでもないわ。

そろそろ時間ね。言っておくけど、事情があるからって私は昨日の決勝のこと許してないわよ。もし今日も同じような事したら、絶対に許さないからね。

……へぇそう、ずいぶんな自信じゃない。なら私は、本気のあんたを昨日みたいに撃ち抜いてあげるわ。楽しみにしてなさい、キリト。

……あなたにも、今日こそ勝つわ。私はあなたの『相棒』なんだって、胸を張って言う為に。『私は強い』って言ってくれたあなたの言葉を証明するために。だから

「首を洗って待ってなさい、『ヴィント』」

GGO

『Ｓｗｏｒｄ（ソード）　Ａｒｔ（アート）・Ｏｎｌｉｎｅ（オンライン）』略称『ＳＡＯ』

２０２２年にサービスを開始した、完全な仮想現実による世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧ。フルダイブＶＲゲームの登場に多くのゲーマーが歓喜し、そして伝説となり得たこのゲームは、サービス開始と同時にログアウト不可・ゲームでの死＝現実の死となるデスゲームと化した。

約１万人のプレイヤーが閉じ込められ、２年後のゲームクリアによってプレイヤー達が解放されるも、それまでの犠牲者は４桁にも及んだ。

『ＳＡＯ事件』と称されることになるこの事件だが、これで終わりではなかった。解放されたはずのプレイヤー約３００人が意識を取り戻す事無く、眠り続けていたからだ。

このプレイヤー達は、ＳＡＯのサーバーを丸ごとコピー・流用して作られたＭＭＯＲＰＧ『Ａｌｆｈｅｉｍ（アルヴヘイム）・Ｏｎｌｉｎｅ（オンライン）』略称『ＡＬＯ』に囚われ、人体実験のモルモットにされていたのだ。

ＳＡＯクリアから二カ月後にこれが発覚。囚われていたプレイヤー達も目覚め、本当の意味で全てのプレイヤー（生存者）が解放された。後の呼称は『ＡＬＯ事件』。

立て続けに起こった二つの事件により、ＶＲＭＭＯは衰退・消滅すると思われた。
しかし、その予想は覆された。
『ザ・シード』
ＶＲＭＭＯＲＰＧ作成・制御用のソフトがネットに無料公開され、拡散。これによって個人ですらＶＲＭＭＯの運営が可能となり、多種多様な仮想世界が生まれ、今なお爆発的に増え続けている。
『Ｇｕｎ Ｇａｌｅ Ｏｎｌｉｎｅ（ガンゲイル・オンライン）』略称『ＧＧＯ』もその一つである。

ダダダダダダッ！
空が赤く染まる夕暮れの荒野に、絶え間ない銃声が響く。
「くそ、チョコマカと」
アサルトライフルを撃ちながら毒づく男の視界の先には、動く影があった。いや、影では無い。フードを被り、上から下までの色彩を黒で統一した人間だ。ゲームの仕様なのか、フードの中は真っ暗で顔を確認することは出来ない。
なおも銃弾を撒き散らし続ける男。躱し続けるフードの人物もやられっぱなしではない。両手の拳銃を男に向け、光弾をいくつも発射する。しかし、それは男の周りに現

れた光の膜を通過すると同時に小さくなり、男に着弾するも、細かい粒子となって弾けた。
「無駄無駄ぁ！　その距離からの光学銃じゃ威力は半減以下！　それじゃオレの防弾装備は貫けないし、貫けても大したダメージじゃ無い！　だから」
　自分の優位性を疑っていないのか、男は余裕そうに話す。事実、余裕なのだろう。フードの人物が予想外にしぶとい為に苛立っているが、自身の勝利は確実だと疑っていない。
「いい加減死ね！」
　アサルトライフルの上部からグレネードが発射される。通常のグレネードランチャーの弾丸は山形の軌道なのに対し、このグレネードは銃弾の様に水平に発射された。
　しかし、フードの男はそれを待っていたかのように、発射されたグレネードを光弾で撃ち抜く。グレネードはその場で爆発、炎と爆風が周りに撒き散らされた。
「くっ!?」
　咄嗟に顔を庇う男。煙で視界が塞がれ、銃撃も止めてしまう。その煙を突き破るように、フードの人物が空中から飛び出してきた。
「なあっ!?」

すぐさまライフルを向けようとするが、フードの人物が男の肩を支点に片手で倒立、勢いのまま男の背中に回る。
男が振り返ろうとするが、その前にフードの人物が男のこめかみに銃を当て、そのまま接射した。
「がっ!?」
反動で男の頭が弾かれるも、銃撃は止まらない。男の頭部に向かっていくつもの光弾が数瞬で放たれ、程なく男はオブジェクト片となって弾けた。

「……ふぅう」
フードの人物が緊張を吐きだす様に息を吐き、銃を持った腕を下ろす。
「装備が硬くてＶＩＴが高いだけならまだしも、なんだあのアサルトライフル。所々油断してくれたのと、山が当たって助かったな」
声からして、黒フードの人物は男だったらしい。目の前にメニューウインドウが現れ、プレイヤー撃破によるドロップ品が表示される。
「うおっ、さっきのライフル!?　……これならシノンが使えそうだな。いやでも、あ

いつのスタイル考えると、どうだ？」
とりあえず渡しておこうと考え、ＧＧＯ首都のＳＢＣグロッケンに足を進めるフードの男。
ドロップした銃が『ＸＭ２９　ＯＩＣＷ』というレア武器で、渡された人物が使おうか迷い始めるまで、あと３０分。

それからおよそ一カ月後。
「それで、待ち合わせに遅れた弁明は？」
「ありません、ごめんなさい」
空色の髪と藍色の眼を持った、どことなく猫を連想させる女性の不機嫌な雰囲気と言葉に、フードの男が謝罪の言葉と共に頭を下げる。
それを見た女性は、くすくすと笑った。
「冗談よ。怒ってないわ、ヴィント」
「そう言ってもらえると助かる。けど遅れたのは事実だし、ちゃんと出来る限りの償い

はする」
「そう？　じゃあリアルの高級スイーツセットで手を打ってあげるわ」
「……訂正。ＧＧＯ限定スイーツでご勘弁くださいシノンさん」
「素直でよろしい」
　シノンと呼ばれた女性が、ヴィントと呼ばれたフードの男の言葉に満足そうに頷く。
要はからかわれていたわけだ。
「けど珍しいわね、あんたが遅れるなんて」
「軽くＭｏｂ狩って戻ってくるつもりだったんだけど、襲撃受けた」
　シノンの疑問に、ヴィントが疲れを隠さずに零す。
「待ってる時間がもったいないからってソロで行った俺も悪いかもだけど、こっちの都合も考えろと言いたい。補充しても十分間に合うはずだったのにこれだ」
「ご愁傷様。私としては悪びれなく奢ってもらえるから、感謝するべきかしら？」
「ええ……」

「そういえばあんた、ＢｏＢはどうするの？」
「……どうするかなぁ」

ＢｏＢ。正式名称　Ｂｕｌｌｅｔ（バレット）　ｏｆ（オブ）　Ｂｕｌｌｅｔｓ（バレッツ）。
ＧＧＯで定期的に行われる大会で、内容は『ＧＧＯ最強のプレイヤーを決める対人・個人戦』。１対１の予選トーナメントと、それを通過した３０名によるバトルロイヤルの本大会で構成され、景品としてゲーム内アイテムや実物のモデルガンを手に入れる事が出来る。
そのＢｏＢのことで、ヴィントは盛大に悩み中であった。理由は、数日前の『ＭＭＯ―ストリーム』というネット番組でのことだ。
『本日の【ＭＭＯ―ストリーム】のゲストは、ＧＧＯで開催された第二回ＢｏＢ、その優勝者の闇風さん、準優勝者のゼクシードさんをお招きしています。どうぞ！』
司会の獣耳女性の言葉と共に、２人の男が現れる。
マントとゴーグルを身に付け、左目に電子回路のような刺青が入っているのが見える、赤髪を鶏冠のようにした男、闇風。
服装を白と青で統一し、サングラスを身につけ、爽やかさとスタイリッシュさを演出している青髪の男、ゼクシード。
番組の主要場面とリアルタイムの掲示板スレの抜粋した一部がこれである。

『やはり、闇風さんは連覇、ゼクシードさんは闇風さんへのリベンジが、次のＢｏＢの目標ですか？』
『勿論です』
『いえいえ、私の目標は優勝です。闇風さんへのリベンジは、その過程に過ぎませんよ』
≪脚組んで偉そうに話してるけど、ゼクシードって準優勝者だよな？≫
≪こういうロールなんだ、許してやれ≫

『確かに、ＡＧＩは重要なステータスです。速射と回避、この二つを突出させていれば、強者足り得ました。優勝した闇風さんのようにね。ですが、過去の最強が、現在の最強とは限らない。ステータスも同じですよ。ＡＧＩ特化型は、ＧＧＯ内で装備が充実し始めたこの先、通用しなくなるでしょう』
『……しかしですね、ゼクシードさん。ステータスはあくまで強さを構成するパーツの一つに過ぎません。強力な装備の多くがそれなりのＳＴＲ値を要求するのは事実ですが、それでＡＧＩ型が通用しなくなると断言するのはどうかと』

『ははは、ＡＧＩ型である闇風さんが認めたくない気持ちはわかりますがね、これは確定した未来ですよ』
≪はあぁっ!?≫
≪ざけんなゼクシード！≫
≪煽るなぁ≫
≪闇風も分かりやすく不機嫌になってるな≫
≪そりゃ自分のステ構成完全否定されてるしな≫

『ここで、宣言しましょう！　次の第三回ＢｏＢ、この場にいる闇風さんとこれを見ているであろうヴィントさん。高名なＡＧＩ型でもあるお二人を撃ち倒し、ＡＧＩ万能論なんてものは、もはや過去の話だと証明するとね！』
≪公共電波でトンデモ発言したぞおい≫
≪ていうか、ＡＧＩ万能論広めたのって確かゼクシード……≫
≪闇風は分かるけど、なんでＢｏＢ不出場のヴィント？≫
≪噂では、ＭｏＢ狩りをしていたヴィントをゼクシードが襲撃するも返り討ち、レア装備をドロップしてしまったらしい。これがＢｏＢの敗因だとか≫

≪自業自得じゃねぇかw≫

≪ないわ～≫

『そもそもですね、プレイスタイルなんて千差万別なんですから、他人の情報を鵜呑みにして構成するなんてナンセ……うっ』

『？　ゼクシードさん？』

『あ……か……っ!!?』

≪なんだ？≫

≪ログアウト……にしては変だな。回線が切れた？≫

≪機材トラブル？≫

『え、あの……え～～、回線トラブルのようですね。いずれ回復すると思いますので、番組を続けます』

≪ちょっとうろたえたけど、すぐに持ち直したな司会ちゃん≫

≪さすがのプロ意識≫

『ゼクシードさんに便乗する形になりますが、私も、あいつと決着を付けたいと思っています』

『では、闇風さんも？』

≪お？≫

≪くる？　くる？≫

『ええ。私もここで宣戦布告します。第三回ＢｏＢで、ヴィントと雌雄を決します』

≪きたあああああああ!!!≫

≪まさかの前回ＢｏＢトップ２人から宣戦布告！≫

≪こりゃ受けなきゃ男じゃねぇぜ！≫

≪ヴィントがこれ見てなきゃ意味ないし、そもそもあいつがＢｏＢ出るとは限らんけどな≫

≪それ言ってやるなよ……≫

『お二人の仰っていたヴィントさんですが、闇風さんは一時期コンビを組んでいたとか』

『その情報は少し違いますね。私とあいつはよく狩り場がかち合ってたんです。幾度か銃弾を撃ち合いましたが決着が付かず、そのうち弾の無駄だと不戦となり、共同戦線を張ったりした事もありました。その事からコンビを組んでいると思われたのでしょう』

≪なんだ、違うのか≫

≪そういえば、街で２人一緒にいたの見た事無かったな≫

「出たくないのが本音だけど、ここまで盛り上がっちゃうとなぁ……」

「ＧＧＯ関連の掲示板も、あんたとゼクシード、闇風のバトルを期待するスレばかりね」

ヴィントがテーブルに突っ伏してぼやく。ＢｏＢはあくまで任意の参加制だ。『参加しない』という選択も当然の権利としてある。だが

「これで出ないってなったら、あんたへの批判大殺到ね」

「うへぇ……」

シノンの言葉通り、参加しなければヴィントへの批判は避けられない。ヴィント自身に落ち度はないが、こういう状況では慰めにもならない。批判だけならまだしも、そこから根も葉もない悪評となったら目も当てられない。

加えて

「ＢｏＢはゼクシードのせいでもあるけど、シノンとコンビ組んでることまで言わんでもいいだろうよ闇風ぇ……」

『そのヴィントさんですが、今はＧＧＯ指折りの女性スナイパー、シノンさんとコンビを組んでいると言われていますが、これに関しては？』

≪あ、それは俺も見た≫

≪オレも≫

≪闇風と同じパターンだろ≫

≪冥界の女神様だぞ？　そんなわけ≫

『ああ、それは間違いありません。少し前に２人と共闘の機会があったのですが、どちらも認めています』

≪ヴィント氏ね≫

≪俺、ＢｏＢ出場してヴィント撃ち殺すわ≫

≪いっそグレネードで爆破しろ≫

≪ゼクシードみたいに返り討ちに遭う未来が見えるぜ≫

≪シノンさんのお尻を間近で視姦できるとかテラウラヤマシス≫

≪シノンに撃ち殺されてこい≫

≪運営さん、こいつです≫

殺伐とした世界観からか、ＧＧＯは女性プレイヤーが少ない。その中で、アバターとはいえカッコよさと可愛さを併せ持つ人形めいた少女の容姿、クールさを感じさせる性格、さらにトッププレイヤーに名を連ねるほどの腕前を持ったシノンの人気が出るのは必然だった。

シノンがそれをどう思っているかは別として、そんなシノンとコンビを組んだプレイヤーがいれば、それに向けられる嫉妬は推して知るべし。

「……シノンは、第三回も出るんだろ？」

「勿論」

シノンが「なに当たり前のこと言ってるの？」と顔に出しながらヴィントに答える。

「今更だけど良かったのか？　あの銃売って。お前から見ても、かなり強いやつだったんだろ？」

かつてヴィントがシノンに渡した『ＸＭ２９　ＯＩＣＷ』。この時シノンはアンチマテリアルライフル『ＰＧＭ・ウルティマラティオ・ヘカートⅡ』を入手していたが、ＢｏＢでは近接戦闘が主になると考え、ＸＭ２９で出場。現実では運用面でいくつもの問

題が挙がったプロトタイプであるが、ＧＧＯ内ではプレイヤーのステータス次第でその問題をクリアできる高性能銃となった。

予選・本大会と数々のプレイヤーを屠ったが、いよいよ終盤に差し掛かろうという時にゼクシードと遭遇。シノン曰く「自分を見て酷く苛ついていた」そうだが、そこはＧＧＯ初期からプレイしているトッププレイヤーの１人。シノンをほぼ完封し、敗北させた。

ＢｏＢでは、死亡したプレイヤーの身体はそのまま残り、使っていた武装もその場に残る。それらは他のプレイヤーが回収でき、大会内のみでのアイテムとして使用できる（当然、大会終了後は本来の持ち主に戻る）。ゼクシードもその例に則り、ＸＭ２９を回収したが、自身の銃撃で破損していたそれを、苛立ちを隠さずに地面に叩き付けていた。

なお、戦闘を見たヴィントが

【こいつ、ＸＭ２９（あれ）の前の持ち主じゃん】

と、呟き、それを大会終了後に知ったシノンが

【え、じゃあなに？　あんたに返り討ちにされてドロップしたのと同じ銃を私が持ってたから、あれだけ苛ついてたってこと？　……ちいさ】

と、ゼクシードへの印象を固めていた。

大会のラストは、闇風がゼクシードを一騎討ちの末に下し優勝。シノンの順位は１１

位であった。
　直後に、シノンはＸＭ２９を売りに出し、ＭＭＯゲームでは高額な部類になるＧＧＯの接続料（月３０００円）を数か月気にせずに済むようになった。また、額が額だったため、半額分は無理矢理ヴィントに押し付けた。
「そんなに嫌だったか？　ゼクシードの銃だったのが」
　と、ヴィントは真面目に考えていたが、シノンの答えは全く違った。
「ドロップ品にいちいち目くじら立ててたら、このゲームはプレイできないわよ。そうじゃないわ。確かにＸＭ２９は凄い銃だったわよ。けどあれだと、強いのはあの銃であって私じゃないわ」
　ヘカートや他の銃だったら、あの時の自分では順位はもっと下だったとシノンは言う。
　事実、あの銃はある程度のプレイヤースキルの差を覆せてしまう物だ。ヴィントはゼクシードの慢心の隙を突いて撃破したが、そうでなければ勝敗は逆だったろう。闇風も、ゼクシードがＸＭ２９で武装していれば、敗北していたのは彼だったはずだ。
　ただ単に勝つのが目的ならあの銃でもいいが、それはシノンの目的とは合致しなかった。
「……まあ、当日まで受け付けてるし、もうちょい考えるさ」

「そ。出るんだったら、私があんたを撃ち抜いてあげるわよ？」
「出ない方に考えが傾いたぞ、おい」
シノンが微笑みながら口にした言葉に、ヴィントが即座に返す。さほど親しく無い人間からすれば、シノンの言葉はその態度から冗談のように聞こえるかもしれないが、実際は本気の言葉だ。
尤も、ヴィントもそれは良く分かっているが。
「それじゃあ、行きましょうか」
「ん」
話は終わりとばかりに２人が席を立つ。目指すのはレアアイテムドロップの情報があるダンジョン、その奥に存在するボスモンスター。
残念ながらダンジョンでめぼしいアイテムは入手できなかったが、襲撃して来た対人スコード（泥）ロンを返り討ちにし、その際の戦果と併せてそこそこの収入を得たのであった。

ＧＧＯ　その２

生体兵器が闊歩すると設定された、とあるダンジョン。その最奥に、このダンジョンのボスが存在する。

ボスは一見ヤドカリの様なモンスターだ。ただし、巻貝状の殻はまるで岩石のようにゴツゴツとしており、殻から出ている部分はモンハナシャコそのもの、そして体の大きさがまるで違う。ハンマーだけでも、小柄なプレイヤーなら隠れてしまえるほどに巨大だ。

そしてそんなボスモンスターの前面に陣取り、ヴィントが光弾を撃ち込んでいる。防護フィールドが無いモンスター相手の為、距離を取っても光学銃の威力が削がれる事は無い。しかしヴィントは、あえて近距離で戦っていた。

「おっとぉ！」

ボスがハンマーの腕を僅かに引いたかと思えば、直後に凄まじい速さで振り抜かれた。ヴィントはボスの挙動から攻撃を察知し、全力で回避する。

「うっかり食らったら、俺じゃ一撃死だな。かといって距離取るともっと面倒だしなぁ」

このボス、一定以上の距離を取ると目から極太ビームを撃ったり、殻から棘が生えて

追尾ミサイルを放ったりとしてくるのだ。ボスの後方には攻撃が飛んでこないが、殻で覆われていて碌にダメージが入らず、結果ほぼ真正面戦闘を強いられているのだ。

さらに

「で、ある程度ダメージ与えると、殻に籠って電撃纏いながら回転と回復、か」

しかも回復に制限がない。即座にではなく、時間経過による回復なので中断させれば止まる。だが、中断方法がこの状態で表れる本体とは別のＨＰバーを０にする、というものなのだ。

通常時に比べてダメージが通る様にはなっているが、それでも頑強なため高い破壊力が必要になる。できなければ回復を繰り返され、こちらが息切れしてしまうのだ。

だが実は、ＨＰを０にし、かつ殻ごと破壊できる方法がある。殻の頂点部が宝石のルビーのようになっており、それもボスが殻に籠った状態になるとＨＰバーが出現する。それを破壊するのだ。しかも破壊できるとボス撃破のドロップアイテムにボーナスが付く。

しかし、殻は正三角形ではなく、殻に籠っても傾いた状態であるため、回転すると一カ所に留まらないのだ。近づこうにも攻撃判定のある回転でできず、おまけに遅くではあるがボス自体が移動もする。

軌道上に撃っても全てが当たる訳ではない上に、ルビー自体もやはり硬い。ならば殻

自体を攻撃して回復を中断させた方が堅実なのだ。もちろんルビー破壊を優先するプレイヤー達もいるが、大概は失敗する。

そして残念ながら、ヴィントには高速で動く物を撃ち抜けるだけの狙撃能力は無い。そう、ヴィントには。

――――ヴィントの視線の先で、そのルビーが撃ち抜かれて粉々に砕けた。

それに呼応するようにルビーのあった場所からヒビが広がり、最後には殻も先程のルビーの様に砕けた。

「ギィィィィィィィィッ!?」

殻が無くなった事に動揺したのか、ボスが金切り声を上げる。殻の中にあったボスの体も外に投げ出されている。

「ナイススナイプ」

呟いたヴィントがボスの後ろに回り、二丁拳銃を向け、そのまま連射した。頑強な殻の中にあった体は防御力が無いに等しく、今までが嘘のようにダメージが通る。

ヴィントの正面に体を向けようとするボスだが、それを待ってやる義理は無い。常にボスの背後を取り、連射を続ける。

そして撃破までもう少しというところでボスの挙動が変わる。ぶるぶると震えだし、体の色が赤く染まり始める。

このボス、ＨＰが一定値以下になると自爆し、ヤシガニのような小さなモンスターを無数に撒き散らすのだ。地味にダメージを与えてくるのに倒しても何もドロップせず、全て倒さないとボス撃破にならないというボスの最後の攻撃、というより嫌がらせだ。

だが、爆発する寸前に再びの狙撃がボスに命中。ＨＰが０になり、オブジェクト片となって爆散した。

ヴィントがそれに何も言わず、銃を腰に戻しながら狙撃元に身体を向け、サムズアップする。

その先では、ヘカートⅡを撃ったばかりのシノンが、ヴィントにサムズアップを返していた。

ダンジョンから戻り、グロッケンの酒場の１つでヴィントとシノンが成果を確かめている。

「道中の雑魚モンスターで各種弾薬にエネルギーパック、レア雑魚からコルトＭ１８９２、ベレッタＭ１９１５、と」

「ボスは売却専用のボーナスジュエルと、ブローニングＭ２重機関銃……全部売りね」

「売りだな」

結果、全て売却が決定した。
「まあＭ２がそこそこで売れるだろうし、悪くないだろ」
「そうね」
ブローニングＭ２はＧＧＯのレアリティとしては高い方だが、さすがに２人のプレイスタイルには合わな過ぎた。その重量から、移動すら捨ててその場に留まり続け、弾丸を撃ち続けるスタイルしか取れないからだ。
――――なお、このブローニングＭ２、２人の予想に反して高値で売れ、さらに買ったプレイヤーが第３回ＢｏＢで使用する事になる。

「この後はどうする？　下のダンジョンか、フィールドでＭｏｂ狩りでもするか？　それともショップ回って掘り出し物探すか？」
「それもいいけど、ちょっと話いいかしら」
「？　おう」
ヴィントがいくつか候補を挙げるが、シノンがそれを遮り、話題を挙げる。
「スコードロンに入ろうと思うの」
「……そうか」

　シノンの突然の発言に、ヴィントは返答に数秒を擁した。
「いやうんまあ、俺も前に解散切り出したし、お前が俺と組む理由が無くなったってことだから、喜ばしいことだよな、うん」
「え？　……いや違うわよ!?　別に用済みになったとかじゃなくて!?」
「気にするな。元々そういう関係だったんだから」
「だから違うわよ！　省略した私も悪いけど、ちゃんと話を聞いて!!!」

「第２回ＢｏＢで９位だったダインがリーダーのスコードロンに誘われて、自分より上位だったダインの偵察がてら入ろうと、か」
　と言われても、ヴィントにはダインの姿は浮かばなかったのだが。そもそもＢｏＢ自体、シノンと闇風が出場しなければ暇つぶしで見ていたかもしれない程度だったので、他の出場プレイヤー達を特に気にしていなかった。
　現在ヴィントの頭に残っている本戦出場プレイヤーは『シノン』『闇風』『ゼクシード』の３人だけである。
「そう。向こうから誘われたんだから、堂々とできるでしょ？　向こうにしたら、ついでにあんたも、って思惑もありそうだけど」

「パス」
「でしょうね」
　シノンが言うにはＰｖＰがメインのスコードロンらしく、わざわざ入る理由もヴィントには無かった。
「となると、俺は当面はソロに戻りだな」
「別にスコードロン所属になったからってコンビ活動しちゃいけないわけじゃないけど、どうしても私はあっち優先になっちゃうわね」
　ゲームとは言っても、組織に所属しているのにその組織を蔑ろにするのは褒められることではない。となれば、シノンがスコードロンとしての活動を優先するのはごく自然なことだ。
　リアルの方の問題であればまた別だが。
「それはそうとヴィント」
「ん？　……なんだよ、その顔」
　シノンがニヤニヤしながら、ヴィントを見ている。
「さっきは随分と動揺したわね。私がコンビ解消すると思って、そんなに淋しかった？」
「……そうだな。勘違いだったけど、結構応えた」
　からかうつもりだったシノンだが、ヴィントの予想外の返答に間の抜けた表情を晒し

た。一瞬からかい返すつもりかと考えたが、ヴィントの様子から本心だと分かる。
「……あんた、熱でもあるの？　大丈夫？　ログアウトしたほうがいいんじゃない？」
「おい」
あんまりな言葉に、ヴィントが声を低くして返す。
「つたく、下のダンジョンで雑魚狩り、決定！　行くぞ！」
「あ、ちょっと待ちなさいよ、ヴィント」
ヴィントが苛立たしげに席を立って酒場の外に向かい、その後をシノンが追い駆ける。
シノンの顔には、隠しきれない笑みが浮かんでいた。
なお、Ｍｏｂ狩りはヴィントの無双状態だった。

シノンとのコンビ活動を休止してから１週間、とある高難度ダンジョンにヴィントの姿があった。
ソロ時代からヴィントは時折様々な高難度ダンジョンに潜り、マッピングやボス戦を

行っていたのだ。
装備は全てショップで買えるもの（高価な物込み）で統一し、死亡時のドロップ品を補充できるようにしている。
今のヴィントはフード付きの黒コートは着ておらず、ＧＧＯでスタンダードな防具装備となっている。また、コート入手前に装備していた防毒機能付きのフルフェイスマスクを被っているので、やはり顔は見えない。
高難度ボスをソロで戦うのは当然無謀に近い。ヴィントも幾度となく死亡している。
だが、稀に戦いが上手く嵌まり、時間を掛け、装備をほとんど消費して倒せる事がある。そしてその場合、ヴィント自身が使えるかどうかはともかく、ほぼ確実に高レアアイテムが落ちる。
この日は、その上の物だった。
「……今これ出るか」
ウインドウに表示されたドロップアイテムは、間違いなく激レアに分類され、ヴィントよりもシノンが扱うべき銃だ。ヴィントが後ろを振り返るが、当然そこにシノンの姿はない。
「……俺、こんなに女々しかったのか」
というかシステムにも見抜かれてるのか？　と、ヴィントが自己嫌悪しながらウイン

ドウを消す。
　ドロップアイテムは一度オブジェクト化する、またはストレージから移動させると重量が発生する仕様なので、今はそれを避けた。
　ちなみに、先日行われたアップデートで、プレイヤーのデスペナのドロップが既にオブジェクト化されていた物はその場に落ちる仕様に変わった。一定時間内は撃破したプレイヤーのみ拾える仕様にはなっているが、取りに行く手間とドロップ品の重量が無視できなくなっている。
「どうか死にませんように、と」
　装備は殆ど使い切ってしまったので、モンスターと出会っても逃げの一択だ。ボスのいた場所から移動を開始。高いＡＧＩと軽業スキルをフルに使い、ヴィントはダンジョン脱出を目指す。

「で、無事にグロッケンに辿りつけたわけね」
「そう」
　何度かモンスターと遭遇し、その内数体と交戦が避けられなかった結果、全ての装備

がエネルギー切れを起こすも、ヴィントはなんとかグロッケンに到着。
ドロップ銃の保管とエネルギー補充をするために移動しようとした時、スコードロンの集会を終えたシノンと偶然に遭遇。そのまま互いの報告会と移行した。
「けど久しぶりね、そのマスク。1か月以上着けてなかったわよね」
「性能はいいんだけど、それはあっちも同じだしな。これは無駄ギミックもあるし」
ヴィントが自身のマスクを指で突きながら苦笑する。今ヴィントが着けているフルフェイスマスクは、現実のサバイバルゲームなどでも着けられるようなデザインなのだが、なぜかゴーグル部分が赤く光るのだ。
赤外線が見えるなどの機能でもなく、完全に演出だけの仕様となっている。なお、夜間戦闘だとゴーグルの光で自身の位置がバレるデメリット付きとなる。
目を赤く輝かせながら狙ってくる様は、中々恐怖を煽るかもしれないが。
「まあマスクは置いといて、ダインのスコードロンはどんな感じだ？」
「……はぁ」
「まて、なんで溜息」
ダインのスコードロンは確かに対人メインではあった。だが、自分達が確実に優位に立てる相手だけを狙い、危機らしい危機もなく撤退する安全第一の、と注釈が付いたらしい。

堅実とも言えるし、プレイスタイルを否定する気は無いが、どう考えても強プレイヤーと戦える可能性は低い。早まったと直ぐに後悔し、偵察のためとシノンは割り切る事にしているそうだ。

この点で言うと、シノンとヴィントのコンビは互いが有名プレイヤーである事もあり、ドロップ目当て以外にも名を上げる目的で襲撃するプレイヤーもいるので、さほど困っていなかった。

「それで、その銃ってなんなの？」

シノンの疑問に、ヴィントは無言でウインドウを操作し、それを見せる。

「……え、これ、実装されたの？」

「バグじゃなければ、実装されたってことだな」

ヴィントが続けてウインドウを操作し、今度はシノンのウインドウが展開される。そこには、銃をシノンへ譲渡するというメッセージと承諾・拒否ボタンが表示されていた。

「……いいの？」

「俺じゃあ使えないことは無いけど活かしきれないし、過重ペナルティ受けてまで持つ程じゃないしな。そいつもお前が持ってる方が喜ぶだろ」

いらないのなら売るけど、とヴィントは言う。シノンは少し悩んだが、承諾ボタンを押して銃を受け取った。

「シノン、集会終わったってことは、今日はもうスコードロンの活動ないんだろ？」
「まあね。銃のお礼も兼ねて、用があるなら付き合うわよ」
「なら、ショップ回り同行しないか？　たぶん、今日の俺はツいてる気がしてな、なにか掘り出し物見つかるんじゃないかって思うんだ」
「へえ、あんたがそう言うなんて初めてじゃない？　ＯＫよ」
「よし」
　シノンの同意を得て、ヴィントはグロッケンに存在する専門店を頭の中でピックアップしながら席を立つ。
「その前に保管ルーム寄らせて。過重ペナルティ受けちゃってるの」
「……悪い、頭から抜けてた」
　と同時に、シノンから至急の案件が飛んできた。
　ＧＧＯでは各プレイヤーに『保管ルーム』というアイテム収納スペースが与えられ、拠点となる街に配置される。
　ＧＧＯのプレイヤーにはストレージ内のアイテムも含め、装備の合計重量に制限があり、これを越えると過重状態となり、ペナルティで移動速度が極端に遅くなってしまう。

それを回避するために、今は使用しない銃や弾丸、素材アイテムなどを格納しておくのだ。

ＳＴＲを伸ばせばその制限の上限を上げられるが、制限自体が消えるわけではない。ＳＴＲが伸びていない、または重量のある武器を持つプレイヤーは、油断すると制限をあっさり越えてしまう為、保管ルームには大変お世話になる。

余談ではあるが、この保管ルームへは直接赴く事も出来る為、ガンマニアなコレクターはここで揃えた銃器を眺めて恍惚としているという話もある。

ヘカートは今回のスコードロン活動に必要なかったので所持していなかったが、代わりにアサルトライフルをメインに据え、その上のドロップ銃はさすがに重量制限オーバーだったらしい。

場所考えて渡すんだった、と後悔しながら、シノンと共に歩みを進める。だがその足取りは、とても軽かった。

「……ＭＰ７にＰ９０が新品でこの値段、とんでもない掘り出し物ね」

いくつもショップを回り、大型ショップではなく個人経営と称せる様な小さな店で、シノンの目に大安売りのレア銃が止まった。

「買うか？」
「う、どうしよう……。サブで使うにしてもゴツすぎる気もするし」
「でも他のプレイヤー見たら買われるよな、これ」
「……買うわ！」
シノンはありえる未来を見て、購入を決意。安くない買い物ではあったが、十分な戦果だ。
「ヴィント、あんたは何かあった？」
「スカ」
どうやら今日運が良いのはヴィントではなく、シノンだったようだ。
「ま、出会えるかは運次第。素材にできる銃も安いし、手持ちをカスタムしてグレードアップするさ」
ヴィントが指差したのは、壁に展示されている1丁のリボルバー実弾拳銃。
「……いや待ってプファイファー・ツェリスカってあんた」
「冗談だよ」
そもそもコレ素材にしたって俺じゃ使えない物にしかならんって。ヴィントは笑いながら手を下ろす。
この銃、世界最強の拳銃の称号を持ってこそいるが、使う銃弾は象などの大型動物を

狩猟するための大口径マグナム弾で、本体もそれを撃ち出す為に超大型化し、反動こそ機構の工夫でそれなりに軽減できているが、『重量及び巨大さ』『拳銃としては過剰な威力』『安全性の欠如』から拳銃として扱うには『全く』適していない代物である。

もともと称号のために実用性を完全無視して造られた銃だから当然ではあるが。

ステータス次第で運用自体はできるだろうが、そうまでしてこの銃を使う価値はおそらくない。

が、やはり『最強』という肩書の強さか、それなりの人気がある銃である。現実ではハンドメイドの受注生産の銃だが、その実用性からか、ＧＧＯでは価格こそ高いがレアリティはそれほどではない。

「本当はこっち」

次にヴィントが出した銃は、きちんと『拳銃』と呼べるものだった。また、かなり有名な銃でもある。

「……弾は？」

「．５０ＡＥ」

「そっちも大概じゃない」

だが、質問の返答に、シノンは呆れたように呟く。

「ほんと、あんたに撃たれるプレイヤーが気の毒ね」

「シノン、鏡持ってないか？　お前の前にかざそうと思うんだが」
「……真っ黒い影が弾幕の中を高速で寄ってきて、近づかれたら死ぬのよ？　まるで死霊じゃない」
「前に、遮蔽物ごとプレイヤー狙撃したよな？　狙われたら死ぬって意味はお前も相当だぞ」
なお、２人を知る第三者、例えば闇風などがこの場面を見たら、こう呟くだろう。
【どっちもどっちだ】
と。なおも軽い言い合いを続けた２人だが
「やめるか。不毛だ」
「そうね」
簡単に話を止めた。互いに悪感情はないため、引き下がる時もあっさりしたものだった。
この後さらに２人は２、３軒ショップを回り、それでもまだ時間の猶予があったことも手伝って、シノンが譲られた銃の試射がしたいという事で地下ダンジョンに赴くのだった。

ＧＧＯ　その３

西日によって黄色く照らされる砂と岩、そして朽ちた高層建造物が点在する荒野。その中の岩山の１つに、１組のスコードロンの姿があった。

「おせえなぁ……なあダインよぉ、ほんとに来るのかぁ？　先週襲われた奴等が同じルート通り続けるとか、普通ありえねえだろ」

顔をゴーグルとスカーフで隠した男、アラシが、リーダーであるダインに対し疑問を呈する。

このスコードロンは現在、獲物と定めたとあるスコードロンを待ち伏せているのだ。ただし、予想時間を大幅に過ぎているが。

「バカやろう、オレが自分で確かめたんだぞ、もっと信用しろ。あいつ等は間違いなく、このルートを使い続けてる。まあ、今日はいつもより遅いってのは認めるがな」

大柄な体躯と無骨な顔に八の字の口髭を生やし、黄土色のハットとジャケットを身に纏った男、スコードロンのリーダーであるダインが反論する。

「大方、Ｍｏｂの出が良くて粘ってるんだろうさ。Ｍｏｂ狩り特化スコードロンは、効率の良い狩り場見つけたらそこに入り浸るもんだ。ルートにしても、変更して時間食うよ

りも最短を選んだんだろうさ。また襲われたって、それ以上に稼げんなら変える必要無えってな。プライドのない連中だ」

ダインがここを訪れるだろうスコードロンを嘲る様に笑う。

「けど、向こうも対策くらいするんじゃないですか？　いくらなんでも、前と同じってことはないでしょう」

そこに機械的なゴーグルをした特殊部隊風の男、ジンが疑問を挙げる。襲われたのに、以前と変わらずそのままなど、誰が考えてもある筈が無いのだから。

「だとしても、一番手っ取り早い対人用の実弾銃を人数分揃えるのは直ぐには無理だ。精々、支援火器一丁が関の山。そして」

ダインは、離れた場所にいる1人のメンバーに視線を向けた。

「それは、狙撃銃を持ってきてもらったＧＧＯ1のスナイパーが狙い撃つって寸法だ」

そこには、臨時でスコードロンに参加しているシノンがいた。

「作戦に死角はねえよ。なあ、シノン」

「……仕事はキッチリするわ」

コクリと頷き、返事をしたシノン。無愛想ではあるがキチンと返事をしたので、ダインは何も言わずにシノンから視線を外した。

「ま、そりゃそうだ。シノンの遠距離狙撃がありゃあ優位は変わらねえやな。それはそ

れとして……」

モヒカン頭に土偶の目を連想させるようなゴーグルをした軽薄そうな男、ギンロウが、シノンに近寄る。

「シノっちさぁ～、このあと時間ある？　俺も狙撃スキル上げたいから相談に乗ってほしいなぁ～って。どっかでお茶でもどう？　なんだったらその銃の練習にも付き合うよ～」

ギンロウの言葉に、シノンはちらりと横に置かれている銃を見る。

ヘカートに比べれば細身な、しかし全長に迫る大型の銃。先進的なグリップ一体型ストックや全体に施された艶消しのダークグレー、そして銃の先端に長い消音器（サプレッサー）を装着、いや、はじめからソレの使用を前提に設計されている。

その銃の名は『アキュラシー・インターナショナル・Ｌ１１５Ａ３』。

二千メートルを超える射程とサプレッサーによって、撃たれた者は狙撃者の姿も見えず、銃声も聞こえず死ぬことから『沈黙の暗殺者（サイレント・アサシン）』とも呼ばれる狙撃銃であり、一週間前にヴィントから譲られた銃である。

「……ごめんなさいギンロウさん。このあとは、ちょっとリアルの用事があるので」

言い寄ってくるギンロウに、シノンは当たり障りが無い理由で断る。

「そっかぁ、シノっち学生だもんな。大学生？　用事ってレポートとか？」

「えっと……」
「ギンロウさん、シノンさん困ってるでしょう……」
さすがにギンロウを見咎めたのか、スコードロンメンバーが助け船を出す。
「あんまりしつこいとヴィントに撃ち殺されるぞ」
「うっ、そりゃ勘弁。悪かったな、シノン」
ギンロウはそそくさとシノンから離れていく。それを見て、マフラーで隠したシノンの口からホッと息が吐かれる。
数日前のログアウトの際、気が緩んでいたのかシノンは【学校が】と口を滑らせてしまったのだ。元々それとなく口説かれていたが、学生だと分かってからやや頻度が上がった気がするとシノンは思った。
「リアルの話はＮＧですよギンロウさん」
「そうそう。いくら向こうでも寂しい独身（ソロ）だからって」
「うるへー！　お前らだって何年も春来てないだろうがー！」
「あ、俺彼女できました」
「「なにぃ!!?」」
リアルでも知り合いらしい３人が、内１人の突然の告白に喧々囂々となった。待ち伏せ中ということは分かっているのか、ある程度声や挙動を抑えてはいるが、それを見た

ダインが、疲れた様に呆れと共に溜息を吐いた。
「来たぞ」
それも索敵をしていたメンバーの一言でピタリと止むのだから、流石というべきなのか。
ダインが鳥の羽を飾ってある黒いヘルメットを被った男、ミソから双眼鏡を受け取り、シノンも伏射姿勢になって銃のスコープを覗く。
「……確かにあいつらだが７人か。１人増えてるな」
標的としていたスコードロンで間違いないらしく、さらにダインが戦力の確認を始める。
「光学系ブラスターの前衛４人、大口径レーザーライフル１人……いた。ありゃ『ＦＮ・ＭＩＮＩＭＩ』か。光学銃から持ち変えたのはあいつだけだな。優先排除目標はとりあえずこいつだ」
ミニミは自衛隊でも名称を変えて採用されている優秀な分隊支援火器だ。唯一らしい実弾銃を任せられているのだから、あのスコードロンの中でも優秀なプレイヤーなのだろう。ダインの判断は尤もだ。
さらにダインは、新たに増えていたプレイヤーに視線を集中する。
「最後は……マントで顔が見えねぇな」

肩幅や背丈から相当な巨漢であろうその男は、その姿をマントで隠していた。隠れていないのは口元と足元だけだ。他のメンバーが皆銃を出しているのに、この男だけそれが見えず、正体がわからない。

「アレじゃねえのか？　噂の……『デス・ガン』」

それをギンロウが、口調に僅かな緊張を帯びさせながら推測を告げる。

『デス・ガン』

それは、ＧＧＯの都市伝説の１つである。発端はＭＭＯ―ストリーム中にゼクシードが姿を消したことだ。

その時、グロッケンにある大きな酒場の１つで、黒いマントを被ったプレイヤーがゼクシードの映るホロパネルを黒い拳銃で銃撃したというのだ。

街中ではプレイヤーのＨＰを削るどころか、オブジェクトを破壊する事もできない。当然その行為は何の成果も出さない……筈だった。しかし、ワンテンポ置いた次の瞬間、画面の中のゼクシードが苦しみ出し、そのまま消えた。

さらにもう１人、同じような状況のプレイヤーがいる。名前は『薄塩たらこ』。グロッケンの中央広場でスコードロンの集会に出ていたところ、乱入してきたプレイヤーに銃撃された。

街中の為にやはりダメージは入らず、撃ってきたプレイヤーに詰め寄ろうとしたが、

途端に苦しみだし、落ちたらしい。
　そしてどちらのケースでも、銃撃したプレイヤーは、フードの奥で赤い目を光らせながらこう名乗ったそうだ。
【俺とこの銃の名は、《死銃》……《デス・ガン》】
と。
　撃たれた時の様子、そしてそれから両名がログインしていないことから、撃たれた者は本当に死ぬ、という都市伝説。
「はっ、まさか。あんなのただの迷信だよ」
　ギンロウの言葉を、ダインは笑い飛ばしながらあっさりと否定する。そしてこれが、ＧＧＯでの『デス・ガン』への一般的な印象だ。
『ゼクシード』と『薄塩たらこ』が撃たれて以来ログインしていないのは間違いないらしいが、それだけだ。『本当に死んだのでは？』と考えている人間もいることはいるが、２人のリアルを誰も知らなかった為に詳細不明。さらには現実のニュースでもそういった報道はされていない。加えて、ネットゲームで急にログインしなくなるという話は珍しくも無い。
　故に、ほとんどの人間は『デス・ガン』を信じていない。中には『引退記念ドッキリ』だと考える人間もいる。

シノンも、『デス・ガン』は都市伝説の一種としか考えていなかった。……一時、ヴィントが不機嫌になる時期があったが。

「さて、あの大男はなんだって話だな。武装も出してねぇみたいだし、俺はＳＴＲ全振りにしたアイテム運搬の運び屋じゃないかと思うんだが……シノン、お前はどう思う」

ダインに話を振られ、シノンはスコープを覗きながら考え、そして話す。

「……運び屋にしては、堂々と歩きすぎてる気がする。それに、周りも緊張感が薄い様に思える」

向こうも何人かが双眼鏡で辺りを見渡して警戒しているが、雑談でもしながらなのか時折笑っている。反対に大男は、マントに隠れていない口元を引き締め、黙々と歩いていた。

「ダインの言った通り、襲われてもそれ以上に稼げればいい、って思ってるからじゃねぇの？」

「かもしれない。けどあの大男のマントがどうにも気にかかる。正体を隠す意図なら、マスクでも被ればいいのに」

シノンの言葉に、ダインが顎に手を当てて考えに耽る。数秒ほどで、ダインは再びシノンに問いかける。

「シノン、もしおまえが最初に狙撃するなら、どいつを狙う?」
「あの大男。不確定を排除したい」
　シノンは即座に返した。
「……よし、第一目標はあの大男、第二目標はミニミ持ちだ。狙撃タイミングはこっちから指示する」
「わかった」
「行くぞ」
　シノンを除いた全員が、目的のポイントに移動を開始する。シノンの狙撃で不安要素を取り除いた後、残ったメンバーをダイン達が奇襲するのが今回の作戦だ。
　メンバーと連絡を取る為のヘッドセットを左耳に装着し、シノンは意識と姿勢を『視る』から『撃つ』に切り替える。
　距離と風向き、標的の移動速度を考慮して銃を微調整し、右手をトリガーに触れさせる。
　途端、シノンの視界にライトグリーンの円が現れ、拡縮を繰り返す。これが撃ち手側に現れる攻撃的システム・アシスト『着弾予測円(バレットサークル)』である。距離や銃の性能、スキル等によっても円の拡縮は変動するが、それでも最重要なのは心拍だ。心臓が鼓動すると円が大きく広がり、それが徐々に縮小、次の鼓動でまた広がる。緊張によって心拍数が上

がれば、サークルはより大きく、より早く拡縮する。そして撃たれた弾丸は、この円の内側のどこかにランダムで着弾する。

つまり命中率を上げるには、精神状態を平静に、そして鼓動と鼓動の谷間に撃たなければならない。

だが、興奮や緊張を自然と持つ場面で、それを為せる人間は大勢いるだろうか。

答えは否だ。

さらに、守備的システム・アシスト『着弾予測線（バレット・ライン）』の存在だ。こちらは撃たれる側のプレイヤーの視界に現れるもので、相手から放たれる弾丸の軌道が赤い光の筋となって見える。つまり、弾丸の軌道があらかじめ分かるのだ。

スナイパーは姿を認識されていない限り、最初の一発だけ弾道予測線を表示させないことができるが、２発目以降は通常通りとなってしまう。つまり一発必中が求められるのだ。

だからこそＧＧＯではスナイパーと呼べるプレイヤーは少ない。なにせ当たらないのだから。１０００メートル以上の距離から狙撃を成功できるものはさらに希少だ。

今、シノンと標的の距離はおよそ１７００メートル。シノンの視界のサークルのおよそ４割を標的の姿が占めている。つまり現在の命中率は４０％というわけだが、これですら驚異的な高さだ。

『配置についた。そっちはどうだ』
ヘッドセットから、ダインの声が響いた。
「敵はコース、速度共に変化なし。そちらとの距離４００、こちらは１６００」
『いけるか？』
「問題ない」
『よし、狙撃開始』
ダインから指示が下り
「了解」
氷の一射が放たれる。

ヘカートにＬ１１５。どちらも冷酷に敵の命を奪う存在だが、ヘカートがじゃじゃ馬な女神なら、Ｌ１１５は寡黙な仕事人といった印象をシノンは持った。相棒はと問われれば、シノンは躊躇いなくヘカートを挙げるが、扱いやすさならＬ１１５を挙げるだろ

う。Ｌ１１５は、忠実な部下といったところだろうか。

――――私は氷。どれだけ激情を滾らせても揺るがない、氷の狙撃手。

自分に言い聞かせるように心で呟くと、心臓の動悸が嘘のように収まっていく。かつてシノンは自身を『冷たい氷で出来た機械』と称したが

【……え、どの辺が？】

と、ヴィントに本気で分からないと返された。今思い出してもムッとくるシノンだが、それも無理はなかった。当時のシノンは屈せず、揺るがず、流す涙を持たない冷酷な氷のような強者になろうと努めていたが、元々感情が希薄なタイプでは無いのだから。

そして、もうシノンは自身の氷を溶かされている。今更氷の機械に戻れるとは思っていないし、なろうとも思わない。

だが、スナイパーに必要な『冷静沈着』のイメージ。シノンの中でそれが最も強かったのが『氷』だったため、今なお使い続けている。

シノンの視界に映るサークルの拡縮が穏やかになり、最小時を明確に認識できるようになる。そしてサークルが目標の頭部に全て収まった時

シノンは引き金を引いた。

サプレッサーによってマグナム口径の銃を撃ったとは思えないほど静かに、発射炎（マズル・フラッシュ）もさほど発する事無く放たれた銃弾は、狙いたがわず大男の頭に命中、破砕。

次の瞬間には男の身体もオブジェクト片となって砕け散った。

突然の惨事に、周りに居たスコードロンメンバーが浮足立つ。その間にシノンはボルトハンドルを引いて空薬莢を排出、弾丸を再装填し、ミニミ持ちを狙う。

いまだ動揺から抜け切れていないプレイヤーには、即座に発射点を認識して予測線を出現させ、そこから回避する事は難しい。

放たれた２発目はミニミ持ちの頭部に吸い込まれ、大男同様にオブジェクト片となり果てた。……高価なミニミがデスペナとしてドロップされ、まさに踏んだり蹴ったりである。

実力のあるプレイヤー相手ではこの２発目はまず当たらないのだが、残念ながら『元』ミニミ持ちのプレイヤーは当て嵌まらなかったようだ。

「第一、■第二目標、共に成功（クリア）」

『了解。シノンはその場で待機。……アタック開始。ゴーゴーゴー！』

狙撃完了の連絡を受けたダイン達が突撃を開始。光学銃のみになってしまった敵スコードロンを、対光弾防護フィールドを装備したダイン達が危なげなく押し切り、誰も欠ける事無く勝利したのだった。

「はあぁ、これでシノンともお別れかぁ……。シノっちぃ、このまま入っちまおうぜぇ？」

グロッケンでのスコードロンの報告会が終わり、同時にシノンの所属期間も終了。だが、ギンロウがシノンを再び勧誘する。

「……ごめんなさい。元々２週間の約束だから」

「そこをなんとかさぁ～」

「だからしつこいぞギンロウ……」

諦めの悪いギンロウを、アラシが咎める。

「ＧＧＯで貴重な華なんだぞ!?　それで腕も立つとか最高だろうが！」

「……ギンロウさん、ちょっと向こう行きましょう」

「え？　あ、お前等なにしやがあぁぁぁ～……」

さすがにこれ以上はダメだと思ったのか、ギンロウを当人とダイン以外のメンバーがシノンの視界から外すように連れていった。
「……んんっ！　ギンロウの奴はともかく、本当に入る気ないか？　歓迎するぞ」
「やめておくわ。やっぱり私には合わないし。それに……」
シノンが言い淀む様子に、ダインが訝しむ。
「ギンロウ（ああいう人）がいるところはちょっと……」
「……すまん」
が、その理由に、ダインはすぐにシノンに謝罪した。
「ま、まあ気が変わったら言ってくれ。さっきも言ったが、歓迎するからな。じゃあな」
片手を上げながらシノンに別れの挨拶をし、ダインはメンバーの元へと歩いていった。

「……さて、と」
ダインが見えなくなった所で、シノンがメニューウインドウを開き、操作する。
「……やっぱりログインしてない、か」
残念、と呟きながら、シノンはログアウト操作を行った。

電気の点いていない暗い部屋。そのベッドで、ラフな格好をして横たわっていた1人の人間が目を覚ます。身体を起こし、頭に装着していた2つの金属リングとゴーグルを合わせたような形状のフルダイブ機器『アミュスフィア』を外し、代わりに近くに置いていた眼鏡を手に取り、そのまま掛ける。

部屋の電気が点けられ、その人間と置いてある家具を照らす。

部屋に居たのは、眼鏡をかけ、黒髪を両サイドだけ長くし、白リボンで纏めた大人しそうな雰囲気がある少女だった。制服を着れば『文学少女』という言葉が似合いそうである。

少女は携帯端末を手に取り、目的の名前を探し、そこにメールを送る。

≪今なにしてる?≫

返信は直ぐに来た。

≪もうすぐ帰宅。こっちから電話する≫

メッセージを見て、少女がメールを終了する。そのままベッドに座って待っていると、端末から電話着信の音楽が鳴り、少女は直ぐに通話状態にした。

「もしもし」

『俺』
「知ってる」
　端末から聞こえた男の声に、少女が笑いながら答えた。
『スコードロンの所属、今日で終わりだったな』
「そう。向こうで話そうとも思ったんだけど、ログインしてなかったから」
『悪かったって。昨日までそのつもりだったんだけど、急な所用でな』
　その後、少女と男は取り留めのない話をする。互いに悪く思ってないのだろう、声に明るさがあった。
『また入るか？』
「今日は終わり。課題もしなくちゃだから」
『そっか』
　それなら長話も悪いと思ったのか、電話の先の男が話を締める。
『明日からまたよろしくな、シノン』
「こちらこそ、ヴィント」
　話していた男はヴィント。そしてこの少女こそ、シノンの現実（リアル）、朝田詩乃である。

GGO　その4

「わり、朝田。あたしらカラオケで歌いまくってたら電車代なくなっちゃってさぁ。明日返すから1万貸して」

高校の授業が終わり、帰路の途中、馴染みのスーパーに寄ろうとした時に知った顔2人に声を掛けられ、そのまま路地の奥に連れて行かれた詩乃。そこでしゃがんで待っていた女が詩乃に放った言葉がこれである。

女の名前は遠藤。詩乃の同級生だが、アイラインを入れた吊り目やラメが光る唇を目立たせ、詩乃を見下すような雰囲気から、決して仲の良い関係ではないのがわかる。詩乃を連れてきた2人も、この遠藤の取り巻きだ。

授業が終わって20分も経っていないのにどうやったらカラオケでそこまで歌えるのか、3人とも電車の定期持っているだろう、そもそも電車代で1万円要求するのはどうなんだ、と詩乃の頭の中にいくつも疑問が浮かんだが、口に出すことはしなかった。

口に出す答えは決まっているからだ。

「そんなに持ってないし、あっても貸す気はない」

「あ?」

「用はそれだけ？　なら行くわ」
踵を返そうとした詩乃に、彼女をここまで連れてきた２人が道を阻む。
「……邪魔なんだけど」
「手間ェ……ナメてんじゃねえぞ」
自分たちを馬鹿にされていると感じたのか、遠藤が目元を引き攣らせながら立ち上がり、詩乃に近づく。
手を子供もやる指鉄砲の形にしながら、伸ばされた人差し指を詩乃に向け
「ばぁん！」
遠藤がニタニタ笑いながら、発砲の真似事をした。
それを詩乃は、無表情に見ているだけだった。
「……おい、ビビれよ朝田」
予想とあまりに違う詩乃の態度に、遠藤が声を低くして命令する。だが詩乃は何も変わらずに遠藤を見続ける。
「ビビれっつってんだろ!!」
業を煮やした遠藤が、詩乃の眉間に指を突き付ける。だが、それでも詩乃は表情を変えない。

「この……！」
「お巡りさん、こっちです早く!!」
突然、若い男の声がした。どうやら警察を連れているらしい。この場を見られるのは不味いと思ったのか、遠藤達は詩乃を突き飛ばしながら、一目散に声とは反対方向に逃げていった。
遠藤達の姿が見えなくなると、詩乃が胸に手を置きながら深く深く息を吸い、ゆっくりと吐き出す。
「大丈夫、大丈夫……」
自分に言い聞かせるように、詩乃は小さな声で呟いた。
「大丈夫？　朝田さん」
そんな詩乃に、声を掛ける存在がいた。私服を着た、痩せて小柄の少年で、一見中学生にも見える。
少年の名は新川恭二。この街で詩乃が気を許せる人間の1人である。
「……うん、ありがとう新川君。警官は？」
「嘘だよ、出任せ。よくドラマとかであるじゃない、上手くいってよかったよ」
「そうなんだ。けど、どうしてここに？」
表通りに接してはいるが、建物の間で陰にもなっている路地奥にいた自分を見つけら

れたことに、詩乃が疑問に思った。
「朝田さんの危機ならどこだって駆けつけるよ……って言いたいけど、先輩からメール来たんだよ。朝田さんが１人で帰るから見に行ってくれって。それで学校に向かう途中に、あいつらに連れてかれる朝田さんが見えたから」
「……私はそこまで子供じゃない」
　恭二の答えに、詩乃が不満そうに呟いた。
「その気持ちはわかるけど、ああいう連中は何するかわからないよ？　わざわざ先輩が連絡したってことは、今回が初めてじゃないんでしょ？」
「それは……そうだけど」
　実感の籠る恭二の言葉通り、今回のようなことは初めてではない。学校に報告しても、詩乃の学校での立場を考えたらアテにならないのだ。最近の詩乃は１人で帰路に就かないために、遠藤たちも近寄れなかったのだが。
「このまま立ち話もなんだし、近くの喫茶店に行かない？　奢るよ」
「……じゃあ、折角だし、ご馳走になろうかな」

　数分後、詩乃と恭二は喫茶店の奥まった席に向かい合って座り、頼んだミルクティー

とコーヒーフロートが卓上に置かれていた。
「そうそう、聞いたよ、一昨日の話。大活躍だったんだって？」
「活躍ってほどじゃないよ。不確定要素と不安要素を排除しただけ」
「それ、十分凄いからね？」
なんでもない様に言った詩乃の言葉に、恭二が苦笑いを浮かべた。
「それにしたって、あの『ベヒモス』を倒したんだから、もっと誇ってもいいと思うよ、僕は」
『ベヒモス』
グロッケンが存在し、シノンやヴィントが基本的に活動している中央大陸ではなく、北大陸を根城にしているプレイヤーで、主にスコードロンの用心棒をしている。戦闘は得物である銃を戦略も戦術もなく撃ち続ける脳筋方式。正直これだけなら、さほど脅威にも有名にもならないだろう。だが、彼の持っている銃がそれを覆す。
その銃の名は『ＧＥ・Ｍ１３４ミニガン』。ガトリングガンの一種で、生身で受けると痛みを感じる前に死ぬとされ、『無痛ガン』とすら言われる、激レアにカテゴリーされる銃である。
毎分４０００発という圧倒的連射速度を誇り、ちょっとした遮蔽物程度なら粉微塵にする威力がある。

だが本体重量だけで１８ｋｇあり、駆動の為のバッテリー、その連射速度から大量の弾薬も所持しなければならず、どれだけＳＴＲを伸ばしても過重ペナルティが不可避となる。現実では重量・反動から個人携帯・使用できる代物では無く、軍用ヘリなどに搭載される制圧射撃用の銃だ。

あのスコードロンが予測時間より遅れていたのは、ペナルティを受けていたベヒモスに合わせていた為だ。そして、これほど圧倒的な武装持ちが居るなら、気の緩みもわかる。

尤も、それを披露する前にシノンに撃ち殺されたわけだが。

「誇るって言っても、警戒範囲外からの狙撃で、だからね。別にベヒモスだったからって特別じゃないよ。正面戦闘になって倒せてたら別だけど」

「ちぇっ。余裕だなぁ、朝田さんは」

ベヒモスはその装備の為、ソロ戦では遠くから狙い撃たれやすいなど弱点が多いが、反面、支援を得られる集団戦では短時間ながらも無類の強さを発揮し、本人も集団戦で死亡した事は今までなかったという。

本格戦闘に入る前とはいえ、そんな大物を倒したにも関わらず、なんでもないように言った詩乃に、恭二がコーヒーフロートのアイスをスプーンで突きながら、拗ねたように呟いた。

恭二は知らないが、実は詩乃／シノンはベヒモスと知り合いである。元々ヴィントがベヒモスと顔見知りであり、そこから顔を合わせたのだ。プレイ場所が違うので回数こそ多くないが、３人でトリオを組み、狩りに出たこともある。

要は、あのスコードロンでシノンが姿を隠していたベヒモスを真っ先に警戒したのは、知っていた人物だったからだ。あくまで疑惑程度ではあったが、もしそうであった場合甚大な被害を受けるのは確定なのだから。その辺りも、詩乃が素直に誇れない理由である。

フィールドで敵同士として出会ったら躊躇いなく戦うのはそれぞれが了承しているので、ベヒモス自身はシノンに倒されたことに悪感情はない。

だがやはり悔しさはあったらしく、本人からはヴィントを通じて

≪次は蜂の巣にする≫

と宣戦布告をされている。

「……けど本当に凄いな、朝田さんは」

「え？」

恭二が羨むような感情を滲ませながら、詩乃を見る。

「ヘカートだけじゃなくサイレント・アサシンまで手に入れて。ステータスもあつらえたみたいにＳＴＲ優先だったし、僕から誘ったのに、完全に置いてかれちゃったね」

Ｌ１１５の情報もすでに出回ったらしい。尤も、知れ渡らせるために、シノンも隠さず使い続けているのだが。

遮蔽物越しだろうと構わず撃ち抜くヘカートⅡに、高い隠密性と狙撃能力を持つＬ１１５。どちらも強力なライフルだが、性格がまるで違う２つの銃。

シノンがＢｏＢでどちらを使うのか、はたまた全く違う銃を使うのか。他の出場者達は頭を捻るだろう。

なにせ、第２回でも激レア銃を使っていたのだ。他にはないと断言できないのだから。

「ＡＧＩ型じゃあ、よほどレア運がないと今のＧＧＯじゃ通用しないよ。はぁ、ステ振り間違えたなぁ……」

ＧＧＯには『筋力（ＳＴＲ）』『敏捷（ＡＧＩ）』『耐久（ＶＩＴ）』『器用（ＤＥＸ）』『知力（ＩＮＴ）』『幸運（ＬＵＫ）』の６つの『能力値（ステータス）』と数百種の『技能（スキル）』がある。他のレベル制ゲームであればレベルアップ毎に『職業』『種族』などに合わせて自動で上昇・取得するステータス・スキルを、ＧＧＯでは代わりにポイントを入手、それを各プレイヤーが自由に割り振り、伸ばしていく。

曲者なのが『自由に』という点で、下位スキルを最大レベルまで上げることで取得可能になる上位派生スキルなどの例外を除き、スキルの取得にはポイント以外条件が無く、『ステータス構成・プレイスタイルと合わない』スキルも取得できてしまうのだ。間

違って割り振る・取得してしまっても、諦めるしかない。

『ＡＧＩ型』は文字通り、敏捷（ＡＧＩ）を優先的に上げたステータスタイプで、恭二が言っているのはそれをさらに極端にした一点特化タイプだ。

ＧＧＯサービス開始から半年程は、このＡＧＩ型が主流だった。高い回避力と速射（連射速度ではなく、照準から予測円が安定するまでの時間）によって、他のステータスタイプを圧倒したのだ。

さらにゼクシードが提唱した『ＡＧＩ万能論』。

≪どんな強力な攻撃も当たらなければ意味は無い。こちらの攻撃のみが当たり、向こうの攻撃は全て回避する。それができるＡＧＩ型こそ万能で最強である≫

ゼクシードが当時でも高名プレイヤーだったこともあり、ＧＧＯはＡＧＩ型で溢れた。

だが、命中率にもプラス補正が付く銃が次々に追加され、回避が思うようにいかなくなり、高性能銃が実装されてもそれらは高いＳＴＲ値を要求することが多く、ＳＴＲを伸ばせていないＡＧＩ型は装備出来ない。軽量な高性能銃もあるが、そういったタイプは高レアに分類される傾向にあるため、簡単には手に入らない。

【ＡＧＩ特化型はいずれＧＧＯで通用しなくなる】

『ＡＧＩ万能論』を提唱しておきながらそれを否定したゼクシード。極論ではあるが、

的外れではないのが今のＧＧＯだ。
当のゼクシードはＳＴＲ―ＶＩＴ型であったが、『レア武器を入手した為にＡＧＩ型から転向した』『元々ＳＴＲ型で、流行をミスリードさせるために嘘情報を流した』と２つの意見があり、詩乃は後者の意見だと思っている。
ＡＧＩ型からＳＴＲ型に転向したとされる期間が、あまりに短すぎるからだ。その場合、ＳＴＲ型であるにも関わらずＡＧＩ型に偽装できたという、ゼクシードのプレイヤースキルの高さを示す事にもなるが。
現在の主流はゼクシード同様、強力な武装を装備出来、相手からの攻撃に耐えるコンセプトのＳＴＲ―ＶＩＴ型だ。ＡＧＩ型は高いプレイヤースキルを要求するピーキータイプとなり、それを満たせない大勢がＳＴＲ型に狩られているのが現状である。勿論、そんな現状を物ともしない、闇風を始めとした実力派ＡＧＩ型プレイヤーも多いとは言えないが存在する。
その闇風がＢｏＢで優勝した事で初心者（ニュービー）クラスのＡＧＩ型が一時増えたが、その多くが苦汁を舐め、手遅れになる前に別のステータスタイプに転向している。
そんなＧＧＯの現状故、恭二の愚痴も分からなくはない。しかし、恭二の言葉に詩乃は眉をひそめた。
「確かに、強い人達はレア装備持ってる人は多いよ。先輩だってそうだし。でも、レアど

ころか販売品のカスタムでやってる人達だっている。前回のＢｏＢ本大会だって、半分くらいはそういう人達だったんだから」

加えて、シノンより順位が上の１０人の中にもレア装備無しのプレイヤーが数人いる上に、優勝者の闇風も『キャリコ・Ｍ９００Ａ』というレアとは言えない銃をメインにしている。

『強さにはレア武器が必要』という恭二の考えに、詩乃は賛同できなかった。

「……ごめん、さすがに言い過ぎだったよ。でも、僕にはやっぱりレア武器は必要だよ。闇風や先輩みたいに自分に合ったスタイルも見つからないし、見つけてもＡＧＩ型じゃきっと活かせないし」

だが、恭二も考えは変えなかった。すぐに反論しようとした詩乃だったが、自分が使ったレア武装を頭に思い浮かべてみた。

『ＰＧＭ・ウルティマラティオ・ヘカートⅡ』

『アキュラシー・インターナショナル・Ｌ１１５Ａ３』

『Ｈ＆Ｋ・ＭＰ７』

『ＦＮ・Ｐ９０』

もう手元には無いが、『ＸＭ２９　ＯＩＣＷ』も激レアだ。レア所持に関しては、自分は何も言えないと自覚した詩乃だった。

「じゃあ、次のＢｏＢ、新川くんはエントリーしないの？」
「うん、やめておく。出ても無駄だから……」
　話を収束させるために詩乃が話題を変え、恭二は明確に答えを返した。
　恭二は第２回ＢｏＢで準決勝まで勝ち残っている。成長具合と戦い方次第で本大会出場も可能だと詩乃は思っていたが、本人が既に諦めていた。
「……ねぇ、新川くん。前は断られたけど、今からでも、私達と組まない？　先輩も賛成してくれるよ、きっと」
　詩乃が恭二に提案を挙げた。伸び悩んでいるならば、自分達と組めば刺激になるのでは、と考えたのだ。ＡＧＩ型であるヴィントを間近で見る事もできる。
「……いや、いいよ。僕なんかじゃ、ね」
　だが、恭二の答えはＮＯ。実際は分からないが、詩乃の足手纏いにしかならないと考えている恭二に、その選択は選べなかった。
「そういえば、先輩はＢｏＢどうするのか聞いてる？」
「本人的には出ない方向みたい。やっぱり気が乗らないって」
　ゼクシードがログインしなくなり、それなら、とばかりにＢｏＢでの闇風との決着をＧＧＯプレイヤー達に望まれているヴィント。
　だがそもそも自発的なＰＫを行わないヴィントにとって、ＢｏＢは参加する意義自体

が見出せない。限定アイテムや賞金、『最強』という称号は魅力であり、出なかった時の風評の面倒さはあるが、それでも出場の決意に至るほどではなかった。

「……そっか、出ないんだ」

「出ないと、何か問題あるの？　あ、ひょっとしてヴィントに賭けようと思ってた？」

少々落胆したような恭二に、詩乃が理由を問う。ＢｏＢ本大会開始前にプレイヤー間で誰が優勝するかのトトカルチョが行われるので、それ関連かと冗談半分に言ってみた。

「その時は朝田さんに賭けるって、そうじゃないよ。僕の知り合いがＢｏＢで１，２フィニッシュしたら僕も鼻が高いかな、って思っただけ」

僕自身の功績じゃないのが情けないけどね、と恭二が自嘲するように話した。だが詩乃は今の恭二の言葉に、なにやら考え込む仕草を見せる。

「……そっちでなら、いけるかな」

「え？」

「ううん、こっちの話」

強引に話を打ち切った詩乃が、ふと時計を見る。

「あ、ごめん。帰って夕飯作らなきゃ。ご馳走様、新川くん。今日はかっこよかったよ」

「いつも守ってあげられればいいんだけど……先輩の代わりに、僕が送り迎えしようか

？」
「そこまで甘えられないよ。先輩だって道が同じだからってだけなんだから。それじゃ、またね新川くん」
「うん、またね朝田さん」
席を立ち、店から出ていく詩乃の背中を、恭二は眩しそうに見ていた。

学校と駅の中間あたりにあるアパート。階段を上り、二階にある自分の部屋の前に着く。
ドアの電子錠に暗証番号を入力し、金属鍵を差し込んでロックを外し、そのまま開ける。
部屋の中は灯りが点いておらず、詩乃が「ただいま」と呟くが、誰も応えない。いや、人の気配そのものがない。
この部屋には、詩乃以外誰も住んでいない。祖父母と母親は東北にいるが、詩乃は１人で上京してきたのだ。

5年前、小学5年生の詩乃は母親と共に、ある事件に巻き込まれた。

そこで詩乃は、心に深すぎる傷を負った。

その事件の後、詩乃は小学校では執拗ないじめ、中学校では徹底的な無視をされて過ごすことになった。

さらに詩乃は、その事件によって『銃』に類する物を見るとパニック障害を起こすようになってしまった。今でこそ指鉄砲程度であればさほど動じなくなったが、かつては子供の玩具はおろか、テレビなどの画面を通してですら発作を引き起こす程だった。

詩乃が東京に出てきたのは、周囲の眼から逃れたかったことと、それ以上にあの場所に居続けては傷が癒えることはないと考えたからだった。

だが、詩乃の環境は高校に入学してすぐに逆戻りしてしまった。

その事件の詳細が、学校中に暴露されたからだ。それをしたのは、遠藤とその取り巻きだ。

かつて詩乃は、あの3人を友人と思っていた時期がある。事件のことを知らない場所で『友達になろう』と来てくれた人物達を詩乃は受け入れた。

それが間違いだったと、詩乃は思い知ったが。

遠藤達は詩乃と友達になりたかったのではなく、自分たちが好き勝手できるたまり場が欲しかっただけだったのだ。

時が経つにつれて詩乃の部屋は遠藤たちの私物で溢れていき、酔って寝泊まりすることも頻繁にあった。

数人の男を勝手に部屋に上げていた時に詩乃も真実に気付き、すぐに警察を呼び、偽りの友人関係は終わった。

そして、その報復が詩乃の過去の暴露だった。

学校で詩乃に近づく人間は、教師を含めてほとんどいなくなった。それでも声を掛けてくれるクラスメイトは居たが、遠藤達のこともあり、詩乃はできるかぎり関係を持とうとはしなかった。

友人を得たいなんて弱い心が今の事態を招いた。自分を救えるのは自分だけ、必要なのは己の強さだけ。

【周りはすべて敵。自分を曇らせる敵。なら、私は１人でいい】

そう詩乃は心に決めた。つもりだった。

【銃、好きなんですか？】

恭二と出会い、ＧＧＯを知り、過去に怯える弱い自分と決別できる強さを身に着けよ

うとした。

【いいかげんしつこい。俺、そこまでお前に恨まれることしたか？】

ＧＧＯでヴィントと出会い、コンビを組むようになった。街を回り、Ｍｏｂを狩り、逆に力及ばず両名揃って死亡したこともある。衝突も１度や２度ではなかった。だが、それも含めて、詩乃はとても楽しかった。

とある件でヴィントとシノンは互いのリアルを知り、その縁で自身の氷を溶かされ、コンビ解消を打診された時も、詩乃はそれを了承しようとはしなかった。

『１人でいい』

結局これはただの強がりだったのだと、詩乃が自覚するのは時間の問題だった。

そして詩乃は、ふと考えてしまった。

『自分は、ヴィントと対等なのだろうか』

と。確かにソロで活動するよりも効率はよくなり、それはお互い様だ。だが、ヴィントを助けたことは何度もあるが、それ以上に救われた機会の方が多かった。いやそれ以前に、自分の助力が無くても、ヴィントは苦戦こそすれ、倒されることは無かったのではないか。

１度、シノンはヴィントに直接聞いたことはある。

【いや、そうでなければコンビ組み続けてないだろ】

答えはあっさりと返ってきた。望みの答えであり、嘘偽りではないだろう。それでも詩乃の気が晴れることはなかった。

１度もヴィントを倒せていないのに、そのヴィントの相棒を名乗れるのだろうか。少なくとも、詩乃にはそれができなかった。

闇風のようにそもそも決着がついていなければ、また違ったのだろうが。

そんな時に湧き出た、ヴィントのＢｏＢ出場の可能性。

大きな大会、かつ真剣勝負の場で勝つことができれば、胸を張って『相棒』と名乗れる、そう詩乃は考えた。ヴィントがＰｖＰを好まないことを知っている詩乃が出場を勧めるのは不自然のため、つい茶化してしまったのは悪手だったが、もはや後の祭り。

どうにか引っ張り出せないかと悩んでいたが、そこに恭二がヴィントの出場を望んでいるという情報。

知り合いからも望まれていると知れば、もしかしたら、と考えた詩乃。

制服からリラックスできる部屋着に着替え、エアコンや加湿器のスイッチを入れるなど、ダイブ中の環境を整えていく。

眼鏡を外し、代わりにアミュスフィアを装着、詩乃はベッドに横たわった。

「リンク・スタート」

キーワードを呟き、詩乃は硝煙漂う世界へと飛び込む。

部屋の壁には、幼い子供が描いたらしい1枚の絵が飾られていた。

ＧＧＯ　その５

「ふうん、新川がそんなことをねぇ……」
　ＧＧＯでシノンと合流したヴィントが、シノンから恭二が出場を望んでいると知らされた。が、反応はシノンの想像よりはるかに乏しかった。
「で？」
「で、って……」
「新川がそう思ってるのは分かった。その上で、お前は俺にどうしてほしいんだ？」
　フードの影で見えないが、ヴィントが真っすぐに自分を見ているのがシノンには分かった。
　下手な誤魔化しは要らない、とヴィントが告げているに感じ取れたシノンは、純粋に自分の望みを口にする。
「……ＢｏＢに出て、私と戦ってほしい」
「ん、わかった」
　そして、それに対するヴィントの返答はあっさりした物だった。
「……へ？」

「いやだから、出るよ。ＢｏＢ」
　つい間抜けな声が出てしまったシノン。だが無理もない。アレコレ考えていたのは何だったのか、と言いたくなるほどに、望みの答えを出されたのだから。
「……ねぇ」
「ん？」
「もしかして、初めから私が頼めば出てくれたの？」
「かもな。俺がＰｖＰ好まないって知ってるお前がわざわざ頼むんだから、それだけお前の中で大事なことだろ？　だったら、出場って選択肢も出るさ」
　茶化す様子もなく、ごく当たり前のように言ったヴィントに、シノンは気恥ずかしさを覚えた。
「そ、そうなんだ。けど新川くんじゃダメなのに、なんで私なら良かったの？」
「……ま、こっちの事情だよ」
「？　それってどういう……」
　曖昧な返答にシノンが問い返したが、ヴィントが持っている飲み物を口に運び、中身を全て空けるように容器を傾け、それ以上話す気は無いのだと察した。
「じゃあ、出ることにしたわけだし、行くか」
「どこへ？」

「どこって、総督府だよ。登録」
　容器を空にしたヴィントが立ち上がり、目的地へ赴こうとするも。
「登録は当日にした方がいいわよ」
「？　なんでだ」
　シノンから、やんわりと制止された。
「予選のトーナメント表は登録したプレイヤーがすぐに表示されるから、前もってやっておくと出場するって周りにバレちゃうのよ。で、始まるまで偵察の目が増えちゃうわけ」
「なるほど。けど、お前含めて、前の本大会出場者とかはもう今更じゃないか？　お前だってダインの偵察してたし」
「まあ、ある程度はもう仕方ないけど、確定させて増やす必要もないでしょ」
　実際あんたもマークだけはされてたと思うわよ、とシノンは告げた。
「あ～～時々こっちを見てた奴らはそれか……暇なのか？」
「身も蓋もないわね、あんた。第一、あんたが出るんだから無駄にならなかったわよ」
「そりゃそうだ」
　シノンの返答に、ヴィントが納得したように頷いた。
「なら、どうする？　ＢｏＢに備えて、俺に手の内見られないようにしばらく離れとくか

？」

「あんまり意味がない気がするけど……やれることはやっておくべきね。お願い」

「ん、了解」

一時的なコンビ解消が決まり、ＢｏＢが始まるまで、互いに牙を研ぐことにしたシノンとヴィントであった。

「朝田、掲示板に『遺跡ダンジョンでレアモンスター目撃情報あり』、ってあるぞ」

「行く」

なお、リアルではごく普通に会っている２人である。

ＢｏＢ予選当日、シノンはサンドカラーのマフラーこそ変わらずだが、シャツにジャケット、ズボンという私服風の装備で総督府に向かっていた。少し遅れると告げたヴィントが、合流と同時に受付ができるよう、総督府を待ち合わせ場所に指定したためだ。

「あのー、すいません、ちょっと道を……」

そんな中、不意にシノンは後ろから声を掛けられた。

「（またか……）」

声を掛けてきた相手に気付かれぬよう、シノンは静かに、だが面倒そうにため息を吐いた。

ソロで活動していた時期、シノンは何度もナンパされたことがあるのだ。自身が実力者として名を知られ、ヴィントとコンビを組んでいることを知られてからは、そんな猛者は激減したが（代わりに嫉妬に駆られたプレイヤーがヴィントに襲撃を掛けることは増えたらしい）。

今度はどんな男だ、と振り返った。

そこにいたのは、透き通るように白い肌と長い睫毛に縁とられた眼、艶やかな長い黒髪と、シノンとは別系統で美少女と呼べるだろうプレイヤーだった。

明らかに男ではない。また、現在のＶＲゲームのほとんどは、精神・肉体双方に無視できない悪影響が出るとされているために、アバターを異性に変更することはできず、ＧＧＯも例外ではない。

「……このゲーム、初めて？　どこに行くの？」

女性プレイヤーならば、周りにちらほらいる男性プレイヤーではなく自分に声を掛けるだろう。そう納得したシノンは警戒心を解き、少女に微笑を浮かべながら質問した。

「えっと……はい、初めてなんです。どこか安い武器屋と、総督府っていうところに、バトルロイヤルイベントのエントリーに」

少女がどこか躊躇いながらも目的をシノンへと話す。

「バトルロイヤルって……まさか、ＢｏＢ？　え、でもこのゲーム始めたばかりなんでしょ？」

「まあ、はい。あ、でもステータスは大丈夫です。これ、コンバートなので」

「あ、そうなのね」

コンバートとは、『ザ・シード』で生成されたゲーム間でキャラクター・データを移動させることである（『ザ・シード』による生成ではないが、同じシステムを使っているＡＬＯもコンバート可能）。

データはコンバート先のステータスに適応されるので、仮に『レベル１０００が上限のゲームでレベル８００のキャラ』がレベル１００が上限のゲームにコンバートした場合、自動的にそのゲームでは『レベル８０』のキャラとなり、ステータスもそれに応じたものとなる。

コンバートしたからと、ステータスに＋αが付くわけではない。にも拘わらず「コン

バートだから大丈夫」と言うこの少女は、元のゲームではそれなりの猛者なのだろう。
「けど、コンバートしてすぐにＢｏＢ出ようなんて、根性あるね」
　始めたばかりのゲームの最強決定戦に出るのは、ある意味そのゲームのプレイヤー達を舐めているともとれるが、シノンは素直に少女の度胸を称賛した。
「いいよ、ついてきて」

　少女が連れてこられたのは、まるでアミューズメントパークのような店だった。店の中は様々な色の光や音楽で溢れ、店員は露出の多い衣装を纏った美女ＮＰＣ達だ。
　彼女たちの手や、壁に映し出されているメニュー・ウインドウにずらっと並んでいる黒光りする銃が無ければ、ここがガンショップだと気づかないだろう。
「初心者はここでまず好みの系統の銃を、って感じかな。初心者向けな分、レアな掘り出し物とかはまずないけど」
「なるほど」
「さてと、あなたのステータスタイプは？　少しだけど、アドバイスするわよ」
「えっと、筋力優先、次が素早さ……かな？」

ゲームが変わっているためか、少女はやや疑問形になりながらもシノンの質問に答えた。

「ＳＴＲ―ＡＧＩ型かぁ。ＢｏＢなら、光学系じゃなくて実弾系。となると……」

「あの、光学系って……」

「ああ、このゲームの銃はね、大まかに分けて２種類あるの」

シノンが少女に、簡単な説明をする。

１つは『光学銃』。軽量で安価、射程も長く、命中精度も良いが、『対光弾防護フィールド』で防がれるデメリットがある。しかもフィールド発生器の販売価格もそこまで高くなく、形状もベルト型など様々だがいずれも軽量かつ動きを阻害しないものが多く、現在のＧＧＯではプレイヤーの標準装備状態になっているため、対人戦では基本使われない。逆に、フィールドを持たないＭｏｂ用装備としてはかなり有用。

もう１つは『実弾銃』。威力も高く、防護フィールドを貫通できるが、弾倉などが重く嵩張り、さらに風や湿度によって弾道が影響を受ける。価格も光学銃に比べてかなり高い。

また、光学銃は形状も名称もすべて架空。反対に実弾銃は現実に存在している・した銃がそのまま使われている。

「こんなところ……あれ、待って。あなたコンバートしてきたばかりなのよね？

じゃあ、お金」
「あ」
説明が終わったと同時に、シノンが無視できない大きすぎる問題に気付いた。『コンバート』で移動できるのは『キャラクター・データのみ』で、装備や所持金は対象外となる。
つまり
「せ、１０００クレジット……」
コンバート先での所持金は、初期金額となってしまうのだ。
「……光学で小型のレイガンならいけるけど、実弾系にすると中古のリボルバーも怪しい、かな」
「せ、性能は……」
「ゲーム始めたばかりの初心者が買えるくらいだから……」
ちなみに、中古は新品より割安で買える代わりに、『ランダムで弾詰まりが起こる』『命中率にマイナス補正が掛かる』『銃自体の耐久度が低い』などのデメリットが付与されている。
整備・修復でそういった物は取り除けるが、別途で素材や資金が必要なので、滅多に出回らないレア品でもなければ中古で購入するプレイヤーはまずいない。

「……ねえ、もし良ければだけど、お金貸そうか？」
「え⁉　い、いえいえ、さすがにそこまでしてもらうのは」
初対面の人間からというのもだが、ベテランからの過剰な援助は褒められる物ではない。困っているとはいえ、さすがに少女もその申し出は断った。
なにか、手っ取り早く稼げる手段はないか、と少女はシノンに問いかける。あることはあるけど、と前置きし、シノンは少女を店の一角に案内した。

そこにあったのは、西部劇に出てくるような建物の入り口部分と、その前に立つ、明らかにロボットとわかるガンマンを模したＮＰＣ。さらにＮＰＣの前には、両端に柵を建てられた幅３メートル、長さ２０メートル程の細長い木製（のように見える）通路が伸び、ＮＰＣと通路を挟んだ反対側にゲートと認証用の掌紋スキャン端末がある。
このゲームは簡単に言えば『弾避けゲーム』だ。プレイ料金は５００クレジット。
ＮＰＣの放つ弾丸を避けながら細道を進み、１０メートル進めば１０００クレジット、１５メートルで２０００クレジット、ＮＰＣに触れることができれば、ゲームクリア賞金＋今までの参加者がつぎ込んだ金額が全額バックされる。現在の合計金額は２８万クレジットだ。

結構貯まったわね、とシノンが呟く。
「す、すごい金額ですね」
「金額は、ね。クリアできるかは別だけど」
「え？」
「ちょうどプレイする人がいるから、見てて」
少女とシノンの視線の先で、帽子込みの迷彩軍服とサングラスを付けた男がゲート前でスタートを待っている。少し離れた場所で２人の男が声援を送り、本人もやる気が満ちているのがわかる。
ゲートが開いたと同時に男は勢いよく駆けだす。が、数歩程度で急静止、片足立ちの間抜けなポーズを取ったと思えば、その身体を避けるように、ガンマンから放たれた銃弾が通り過ぎた。
それを見た少女にシノンが『弾道予測線』の説明をしている間も、男は別のポーズを取ったり、屈んだりしながら進んでいく。
だが７メートルまで進んだ時、ガンマンの動きが明確に変わった。リロードが秒に満たないほど高速になり、一定間隔だった射撃が変則的になったのだ。
２発は問題なく躱せたが、３発目で姿勢を崩され、続けて３発の弾丸が男を貫き、ゲームオーバーとなった。

街中のミニゲームなのでプレイ料金以外なにも失っていない男だが、肩を落としてトボトボとゲーム範囲から出て行った。
「ね。左右にあまり動けない中で、あのインチキ染みたリロード速度と早撃ちに変則リズムのおまけ付きで、ほとんどの人はあの辺りが限界。進めば進むほど、予測線と実射撃のタイムラグも無くなっていって、予測線が見える頃には手遅れ。１５メートルラインを超えると、ノーモーションでレーザー攻撃してくるし」
「れ、レーザーですか!?」
さすがに予想外だったのか、少女が驚いたように声を上げ、シノンは予想通りの反応にやや笑いながら続きを話す。
「私も初めて見たときはそんな反応だったわ。まあ、レーザーを見たのはアイツがプレイした時だけだけど」
「アイツ?」
「知り合いがね、このゲームをクリアしてるの。1回目は反応はできたんだけど、掠っちゃってね。後続が居なかったから再プレイして、そのままクリア」
勢いつけて叩いて、ＮＰＣの頭が数回転してたわ、と、シノンが思い出し笑いしながら少女に話した。
「今のところクリアしてるのはアイツだけ。それだけ難易度が高いのよこのゲーム。ク

リアできるってわかったからか、一回リセットされた賞金があそこまで貯まるまでプレイされてるのにね」
「なるほど」
「……え、ちょっと」
　一通り説明し、少女も別の手段を考えるだろうと思ったシノンだが、少女はそれと裏腹にゲームに向かおうとしていた。
「ちゃんと聞いてたの？　これ、難易度が高いって」
「いやぁ、物は試しと言いますし、もしかしたらって」
　どうやら少女はプレイする気満々のようだ。これは止めても無駄かな、とシノンは思った。だが、アドバイスを申し出たのは自分なのだ、形は違うがこれも範疇だろうと、シノンは考えを変えた。
「……このゲームはＮＰＣの目線である程度射線を読めるわ。レーザーは、撃つ瞬間に薄ら笑いするそうよ」
「え？」
「がんばって」
　シノンがポンと少女の肩を叩き、少女を送り出す。少女は何か引っかかる物があったのか、数瞬シノンを見ていたが、すぐにゲームへと向かい、参加料を支払ってスタート

を待った。

結論から言えば、少女はゲームをクリアした。先ほどの男の様に立ち止まることなく、射線の隙間を縫う様に駆け抜け、変則リズムやレーザーもスライディングや跳躍を駆使して躱し、そのままＮＰＣにタッチ。

クリアを祝うファンファーレが鳴り響き、シノンを含めたギャラリーからも、それに被せるように拍手や指笛が響いた。

その最中にシノンの前にウインドウが開き、それを見たシノンが目を見開いたが、キーボードを少し操作した後、すぐにウインドウを閉じた。

資金を得たことで、少女の装備選びを再開。選り取り見取りとまではいかないが、良い性能の銃が買える現状で少女が選んだ物は、しかし。

「このゲームでそれをメインにする人は初めて見たわよ。まあ、最終的には好き好きだけど」

「そうそう。普通に売ってたんだから、これだってちゃんと戦えますよ」

「……そりゃ、使えそうな人は知ってるけどね、私も」

シノンがやや呆れたような顔をしながら、ソレを持つ少女を見る。

片手でも握れる太さの長さ２５センチほどの筒状の金属から、１メートル程のエネルギーの刃を発生させているソレの名は、『フォトンソード・カゲミツＧ４』。

正式名称以外にも『光剣』『ビームサーベル』『ライトセーバー』『レーザーブレード』などなど、プレイヤーが好き勝手に呼んでいる武器である。

軽量かつ高い威力を持つ武器なのだが、銃メインのこのゲームでは斬る前にまず撃ち殺されてしまうため、メインとしてはまず選ばれない武器である。

しかもこのフォトンソード、やたらと高い。カゲミツＧ４、お値段１５万クレジットである。また『エネルギー切れ』や『オーバーヒート』などのデメリットもあり、近接用のサイドアームだとしても、大概は堅実にコンバットナイフなどが使われているのが現状である。

少女が具合を確かめるように剣を幾度も振るい、その堂に入った動きにシノンが感心しながらも、装備選びを続ける。

「メインはそれだとして、サブに何か牽制用で欲しいかな。他の装備の購入とかも考えるとハンドガン……」

少女はシノンの助言に従い、ハンドガンの『ＦＮ・ファイブセブン』をはじめ、防弾

ジャケットやフィールド発生器など小物装備を購入した。
賞金は綺麗さっぱり消え、少々足が出たが、その分はシノンが出した。本人曰く
『良い物見せてくれたお礼よ』
らしい。
「とりあえず、最低限必要なものはこれで終わりかな」
「すいません、すっかりお世話になっちゃって」
「いいよいいよ。私も予選まで予定はなかったし。それじゃ」
突然シノンが少女の手を取り
「え？」
「急ぐよ！」
そのまま少女を連れて店の外へと走り出した。
「わ!?　ちょっ、急にどうしたんです!?」
「大会のエントリーは3時までで、出来るのは総督府だけ！　距離は3キロちょっと！」
「え、ええ!?」
少女が店の中にあるデジタル時計に目をやると、ちょうど時間が変わって『14：47』と表示されていた。シノンが言うには、エントリー操作に5分ほどかかるらしく、最低でも8分で到着しなければならない。

「て、テレポート的な物は無いんですか!?」
「死んで蘇生するときに総督府近くに転移されるけど、街中じゃＨＰは減らないから使えないわ！　でも大丈夫！　足は来てもらってるから！」
　店を出て、シノンはそのまま何かを探す。数秒もすると、目的の物を見つけたシノンが少女を連れてソレに近づく。
　そこには、アイドリング状態のＭＴ３輪バギーと、その運転席にヴィントがいた。先ほどシノンの前に開かれたウインドウはヴィントからの物で、待ち合わせ場所に現れないシノンに確認のメッセージが送られてきたのだ。
　その返答に、シノンは今いる場所と『バギーに乗って来てほしい』という旨のメッセージを送ったのだ。
「ごめん、お待たせ！」
「……待ち合わせ場所来ない上にバギーに乗って来させるとかいった……だれ？」
　シノンだけかと思えば見知らぬ少女がいたことに、ヴィントが言葉を切って疑問を呈した。
「話はあとで！　あなたも乗って！」
「は、はい！」

シノンに急かされ、少女がバギーの後部座席に乗り込む。間髪入れずに、シノンも少女の隣へと乗り込んだ。
「お願い！」
「……ったく、しっかり掴まってろよ、お２人さん！」
ヴィントが何か言いたそうにしたが、ＢｏＢ登録終了まで時間が迫ってることもあり、２人に注意を促し、即座にバギーを発進させた。
ＧＧＯでは乗り物が複数あり、その中で３輪バギーは乗りにくい部類に入る。馬力も速度もあるのだが、その分扱いが難しく、加えて現実でもマニュアルシフトのガソリン車が少なくなっている昨今、このバギーを運転できる人間は少ない。
逆に言えば、現実や他のゲームでＭＴバイクに乗ってる人間はＧＧＯでもこのバギーは運転自体は可能ということであるが、ヴィントはその例には当てはまらない。
デスペナ対策として装備も最低限に、Ｍｏｂを障害物代わりにし（よけ損ねたら轢き逃げアタックになる）、広大な荒野を練習場にして乗り回し、練度を上げたのだ。そのおかげで、シノンとコンビを組んでからも遠出がしやすくなった。
「私が言うのもおかしいけど、間に合いそう!?」
「問題ない！　適正２人乗りに３人乗ってるから速度遅くなってるけど、十分間に合う！」

バギーの爆音に負けない様、大声で言い合うシノンとヴィント。ＧＧＯでは乗り物にも過重ペナルティがあり、プレイヤーと違って大幅な制限が掛かるわけではないが、それでも速度低下は免れない。

だが、登録に必要な時間を確保できる程度の速度は出すことができる。

「そう！　でも早く着くに越したことないから、思いっきり飛ばしちゃって、ヴィント！」

「了、解！」

ヴィントがギアを上げ、バギーがさらに速度を上げながら他の車の間を縫うように駆け抜ける。

「あはは、すごいすごい！」

それにシノンが軽い歓声を上げる。普段は道なき道の荒野をぶっ飛ばしているが、今のスリル満点の運転もシノンには全然アリだった。特にヴィントは街中では基本的に安全運転なので、こんな機会は滅多にないのも拍車を掛けた。

その横で、少女がヴィントを見定めるように視線を向けていたことに、シノンもヴィント本人も気付くことはなかった。

ＧＧＯ　その６

現実であれば逮捕確実な爆走の末、３人を乗せたバギーは無事に総督府前に到着。３人はバギーから飛び降り、入り口に続く階段を駆け上がる。

ＧＧＯの首都であるＳＢＣグロッケンは、『文明の滅びた地球に帰還した、移民船団の宇宙船』という設定があり、その艦橋部分・元司令部が総督府となっている。

キロ単位の全長を持つ船の艦橋らしく、その内部も広大。１階エントランスでは円形ホールの壁にスポンサーのＣＭやらイベント告知やらの巨大パネルモニタがいくつも設置されている。

そんな中、右奥の一角に、コンビニにあるＡＴＭなどと良く似た機械が数十台と並んでおり、３人はその前に立つ。エントリー終了まで、まだ８分ほど残っている。

「エントリーはこれでするの。よくあるタッチパネル式端末だけど、大丈夫？」

「はい、やってみます」

「ん。隣で私もやってるから、わからなかったら訊いて」

シノンと少女が話している間に、ヴィントはエントリー登録を進めていく。この際にリアル情報を入力しておくと、本大会に出場できた場合のみ、参加賞としてオリジナル

モデルガンが郵送されてくる。
　前回のＢｏＢでは、ＧＧＯに存在する光学拳銃『プロキオンＳＬ』のモデルガンだったそうだ。
　第１回のモデルガンは不明だが、もし第２回と違う物であったなら、大会毎に別デザインのモデルガンが入手できるということ。そして、各モデルガンは国内で最大３０丁しか存在しない激レア物となる。オークションにでも出せば、それなりの値段になるかもしれない。
「終わった？」
「ええ、なんとか……」
「ヴィントは？」
「もうちょい……できた」
　シノンが少女に声を掛け、それに少女がなにやら無念そうな様子で返し、ヴィントも少しして完了の報告をする。
「!?」
　途端、ヴィントが勢いよく振り返った。フードの奥で目を鋭くさせているのがわかるほどに警戒心を滲ませ、エントランスを見渡している。
「ど、どうしたの？　急に」

ヴィントの突然の豹変に、シノンが思わず声を掛けた。
「……誰か見てる気がしたんだ……気のせいか？」
ヴィントの目に不審な者も物も映らない。だが、それでもヴィントは警戒を緩めようとはしない。
「そりゃ、ＢｏＢ始まるって時に総督府にあんたがいれば見る人間くらいいるでしょ。そうでなくても、全身黒コートで目立つし」
「……それもそう……か？」
やや腑に落ちないヴィントだったが、実際何も見つけられなかった為、おとなしく警戒を解いた。
「それより、予選のブロックはどこだった？　私はＦの１２番」
「Ｌの３番」
「あなたは？」
「Ｆの３７番です」
「同じブロック……あ、でも大丈夫ね。決勝まで当たらない」
「？　決勝まで当たらないと、何かあるんですか？」
ルールも知らずに出ようとしたのね、あなた……、と半ば呆れを交えながら、シノンが少女に理由を説明する。

「ＢｏＢ本大会には、予選各ブロックの上位２人が行けるの。だから決勝まで進めれば、自動で本大会出場確定ってわけ」
「ああ、なるほど」
「だからって、決勝で当たっても」
シノンが少女に指鉄砲を向け
「手は抜かないけどね」
指先を跳ね上げ、撃つ仕草をした。
「もちろん、私も全力で戦います」
それに対し、少女は不敵な笑みと共に、シノンに宣戦布告を返した。

「で、結局この子誰よ？」
互いに宣戦布告し、話が終わったと判断したヴィントが、後回しにされていた少女の正体をシノンに求めた。
「あ、ごめん。忘れてたわ。えっとね」
それに対し、シノンは少女に声を掛けられてからの一連の流れをヴィントに説明し

た。
　ヴィントはシノンが取った行動に、フードの奥で目をぱちぱちと瞬きした。
「今、珍しいなと思ったでしょ」
「正解。でも珍しいだろ実際」
「まあ、そうね。男だと下心丸見えにしてる奴ばっかりだから、まずしないし。かといってこのゲーム女性プレイヤー少ないし、初心者とは会った事なかったのよね」
「ああ、会うやつはみんな、銃弾撃ち合う位には熟練してるしな」
　そんなシノンの言葉を聞いた少女が、なぜか口元を引き攣らせていた。
「そういえば、自己紹介してなかったわね。これ、私のネームカードね」
　シノンがメインメニューからネームカードを実体化させ、少女の前に差し出す。ネームカードは名前と性別、所属していればスコードロンも表記されるが、シノンとヴィントはコンビを組んでいてもスコードロン登録してあるわけではないので、表記されているのは前２つのみである。
「じゃあ、俺も」
　それに釣られるように、ヴィントもまたカードを実体化させ、シノン同様、少女の前に差し出した。
「あ、えっと……あの……」

だがそれに対し、少女は急にしどろもどろになる。
「……すみません！　自己紹介が遅れて！　私、いや俺はこういう者です！」
意を決したように、少女が勢いよく頭を下げながら、ヴィントとシノンの前にカードを差しだし、２人がそれを見る。
「キリ、ト。変わった名前……Ｍａｌｅ？」
女性にしては変わった名前を確認し、その際に性別表記が目に入ったシノンが、半ば呆然とした声を出した。
女性であれば、性別表記は『Ｆｅｍａｌｅ』でなければならない。だが実際には男性の『Ｍａｌｅ』。つまり、少女改め、キリトは実は男だということだ。
「男の娘アバターがあるって噂は知ってたけど、本当だったんだな。……で、なんで女のフリしてた？」
ヴィントの声が明らかに低くなり、敵意を隠さずにキリトに問いかけた。ハラスメント警告があるので過度な接触はできなくても、女のフリをして更衣室に潜り込み、装備解除によって下着姿や裸になった女性プレイヤーを見る等はできるからだ。
ハラスメント警告の穴も存在するが、街中で、かつこの短時間で初対面のプレイヤーにさせるのはまず不可能なので、あえて思考から外している。
「す、すみません。騙す意図はなくって。ただ、こんなアバターになっちゃったんで、男

のプレイヤーに声かけてもまた面倒になりそうだったから。訂正したらしたで、ナンパ目的と思われそうだし」
「……不純な目的は、何もなかったと？」
「は、はい。それは絶対に」
　言い分を聞いたヴィントが、シノンに視線を向けて判断を仰ぐ。
「……まあ、確認しなかった私にも落ち度はあるし、特に何かされたわけでもないから、私からは何もないわ」
「……シノンがそれでいいなら、俺もこれで終わりだ」
「どうもすみませんでした……」
　当のシノンがキリトを無罪放免したことで、ヴィントも話を終える。キリトは再び、2人に対して頭を下げた。

「それで、その……大変申し訳ないんですが、この後のことも教えていただけると……」
「……シノン、代わる」

「お願い」
キリトが男と判明したため、ヴィントが説明役の交代を買って出、シノンもそれに応じた。
「まずはエレベーターで地下２０階。そこが待機エリアになってる」
ヴィントはエレベーターに向かって歩き始め、キリトが慌てて付いていく。そんな２人の後をシノンも付いて行った。

エレベーター内で、ヴィントがキリトに簡単に説明を行っていく。シノンはヴィントを挟んでキリトの反対側の壁に腕を組んで寄り掛かっているが、間違いがあれば指摘できるよう、説明を聞いていた。
・予選開始と同時に、待機エリアにいる1回戦を控えたプレイヤー全員が自動転送。自身と対戦相手の２人のみがいるバトルフィールドに送られる。
・フィールドは1キロ四方の正方形、地形・天候・時間帯はランダム
・送られたプレイヤーの位置もランダム。ただし、対戦相手とは最低５００メートルの距離が確保されている
・勝利すると待機エリアに、敗北すると1階ホールに転送。敗北していても、再び待機エリアに赴くことは可能。また、すでに対戦相手が決まっている場合は、待機エリア

に送られず、すぐに次の対戦が始まる
・決勝戦のみ、決着後は両名とも待機エリアに転送される
「ＧＧＯにもデスペナはあるけど、ＢｏＢでは発生しないから気にしなくていい。ただし、装備を『破損』じゃなく『破壊』されたらそのままロストだから注意」
「あと弾丸とかグレネード系とか、使い捨てた装備も戻らないから」
「はい」
そうこうしている内に、エレベーターは目的の階に到着、ドアが開く。１階ホールと同じくらいの大きさの半球形ドームだが、こちらは所々の照明でかろうじて全体がわかる程度の暗さだ。
そして、そんな暗さでも存在感を放つ大勢のプレイヤー達の目が、ヴィント達に向けられた。
情報を探ろうとする視線の強さに緊張したキリトだが、ヴィントもシノンも特に気にすることもなく、エレベーターから出ていく。キリトもすぐに気付いて、２人に追い付いた。
「ヴィントだ……」
「直前に名前が出たが、シノンもいるし間違いなく本人だな」
「一緒の可愛い子ちゃん誰だ？」

「知らん」
「両手に花かよ、妬ましい……！」
「落ち着け、排莢しまくってるぞ!?」

「……花じゃないんだよなぁ」
　そう呟きつつ、キリトはヴィントがある方向に頭を向けていることに気付いた。何かあるのかと、キリトもその方向に視線を向けると、無造作に座る１人のプレイヤーが、ヴィントを見て不敵な笑みを浮かべているのが見えた。
　何かしらの関係があるのかと考え、同時に踏み込むのは良くないと思い、２人に付いていくことを優先した。
「更衣室で着替えたら、あとはバトル開始まで適当に。得物は出すなよ、さっきの奴らみたいに対策され放題になるぞ。まあ、メインでもサブでもないやつを出して、って手もあるにはあるけどな」
「あ、はい」
　ヴィントとシノンが特に警戒もなにもしなかったのは、そもそもそれに値する存在ではなかったからだと、キリトもこの段階で気付いた。
「……男と女は別室だからな。もし女の方に『い、行きません行きません！　絶対行

きません！』ならいい。シノン、近くを取っとくから、終わったらきてくれ」
「ん、わかった」
「あれ、着替えないんですか？」
「これ、初めから戦闘用」
２人が更衣室に入るのを確認した後、ヴィントは空いているテーブル席に座り、２人を待つ。
「やあ、ヴィント」
だがそこに、銀灰色の長髪に迷彩柄の上下を身に着けた長身の男プレイヤーが声を掛けてきた。
「シュピーゲル。シノンの応援か？」
「うん、そう」
ヴィントの言葉に短く答えると、シュピーゲルと呼ばれた男がキョロキョロとシノンの姿を捜す。
「……あいつなら更衣室だぞ」
「あ、そうなんだ」
ヴィントからの返答を聞き、シュピーゲルはこの場でシノンを待つことにしたらしい。その間、２人の間に会話は一切なかったが、どちらも気にすることはない。

シュピーゲルのリアルは、詩乃の知り合いである新川恭二なのだが、リアルでもＧＧＯでも、ヴィントとシュピーゲルはシノンを介さなければ『知り合い以上友達未満』という関係だ。悪くはないが良くもない、それ以前という具合である。

一応アドレスの交換自体はしているが、詩乃／シノン関連以外で使われたことはほとんどない。

シノンはシュピーゲルを加えてトリオになることを「先輩も賛成してくれる」と言ったが、正確には「拒否しない」だ。そもそもシノンは、自分抜きでの２人がどういう関係か把握していない。

ヴィントが恭二の願いに対してさほど反応しなかったのも、そもそも相手の願いを聞き入れる程、２人は親しくないということだ。

「お待たせ。あら？　シュピーゲルじゃない」

「やあ、シノン」

ミリタリージャケットやコンバットブーツと、先ほどとはマフラー以外共通点が無い戦闘用装備のシノンの姿を見つけたシュピーゲルが、ヴィントの時より明らかに上機嫌な様子で声を掛けた。

「ここにいるってことは、出場することにしたの？」

「ううん、違うよ。シノンの応援。ここだったら、大画面のパネルで中継も見れるしね」

ドームの天頂部には巨大な多面ホロパネルが設置され、ＢｏＢ予選開始までのカウントダウンが表示されている。予選中、このパネルにはその中継のみが映るので、その点だけでもここに来る意味はある。

ピリピリしている参加者たちの中に混じれる胆力があれば、の話だが。

「けど、登録かなりギリギリだったよね。なにかあったの？」

「予定外の用事よ。簡単に言うと、後ろの人の」

シノンが後ろから付いてきていたキリトを親指で指差す。

防弾アーマーと防護フィールドの結晶を除き、ナイト・カモと呼べそうなほどに上から下まで黒で統一された装備だ。

４人中２人が黒ずくめという、傍から見ると奇異な４人組である。

「あ……、は、はじめまして。ええと、シノンのお友達さん、ですか？」

「……やっぱり騙されるよなぁ……」

「え？」

その見た目から、キリトを女性と勘違いしたシュピーゲルが、たどたどしく挨拶する。その様子を見たヴィントが思わず呟き、それを聞いたシュピーゲルが疑問の声を上げた。

「この人、男よ」

「は？」
　続けてのシノンの暴露に、呆けた声を出すシュピーゲル。
「どうも、キリトです。男です」
「あ、シュピーゲルです。え、でも男って……え？」
　シュピーゲルがシノンとキリトを交互に見る。シノンが俺を初めて紹介した時もこんな感じだったな、と、ヴィントはシュピーゲルの反応を懐かしく思った。
「いやあ、シノンにはすっかりお世話になっちゃって。それはもう色々『懲りてないのかネカマ野郎』すみません、調子乗りました。このゲーム初めてだったんで、色々教示してもらっただけです」
「あ、そうですか」
　シュピーゲルの反応を見てからかおうとでもしたのか、キリトが思わせぶりに言葉を発したが、即座にヴィントによって鎮圧された。
「へえ、別ゲームからわざわざコンバートを」
　開始までわずかばかりの時間があったため、４人が親交を深める、というよりも暇つぶしに近い感覚で話をする。キリトだけ部外者に近いが、本人は特に気にした様子はない。

「今までファンタジー系のやつばかりだったから、たまにはサイバー系のやつもやってみようかな、と思って。銃の戦闘にも興味あったし」
「にしたって、いきなりＢｏＢはどうかと思うけどな」
「あはは……、それシノンさんにも言われました。根性あるね、って。まあ、参加するだけしてみようかな、と思って」
「ふぅん……」
　勝ち残れるとは思っていない、と取れるキリトの言葉だが、それが本心なのか疑わしいとヴィントは思った。
　こいつは勝ち残る、そんな妙な確信がヴィントにはあった。なぜそんなものを抱いたのか、ヴィント自身にも説明できないが。
「……キリト」
「はい？」
「もうバレてんだから、演技の必要ないだろ」
「……それもそう、いや、そうだな」
　ヴィントの指摘に、キリトが口調を本来のものに変える。声のトーンも先ほどより低くはなっているが。
「……一応聞くけど、作ってないわよね？」

「ない。勝手に出る。リアルはちゃんと低いぞ」
　正直、それでも女性で通用する高さだったので、シノンが思わず訊ねてしまった。キリト曰く、どうやらアバターの見た目に沿うよう、声がやや高めに変換されて出てしまうらしい。
「ところで、そのアバター、Ｍ９０００番系だよね？」
「知ってるの？」
　シュピーゲルがキリトのアバターについて何か知っているらしい。シノンが問いかけた。
「めったに出ないレアアバター群で、結構高額で取引されるらしいよ。バイヤーに声掛けられなかった？」
「あ～～～、入ってすぐに声掛けられた。５メガクレジット出すから売ってくれって」
「５メガって、そんなにするの、ソレ」
　取引価格を聞いたシノンが、物珍しそうにキリトを見る。
「できれば変えたかったけど、コンバートだから諦めたんだよ」
「ああそっか、アカウントごとだものね」
　余談ではあるが、シノンも現在使っているアバターを変えようとしたことがある。
　始めた当初、シノンは屈強な女兵士然としたアバターを望んだが、実際には美少女の

アバター。即座にアカウントを破棄し、新たにキャラを作ろうとしたが、シュピーゲルの猛反対で諦めた、という経緯がある。

「……時間だ」

『大変長らくお待たせしました。ただ今より、第3回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントを開始いたします』

ヴィントの呟きに合わせるようにエレキギターのファンファーレが轟き、続いて女性の合成音声がドーム内に響き渡った。

同時に、盛大な拍手と歓声が沸き起こり、その中に自動小銃の作動音やレーザーの発射音が混じる。

「……あれが、テンションに流されるアホどもです」

「えええ……」

予選中、出場者はドーム内からバトルフィールドに転送される。逆に言えば、ドーム内にいなければ転送がされず、不戦敗となってしまうのだ。

そして、ドーム内では弾薬などを販売するショップは存在しない。つまり、ここで消費するということは、戦闘で扱える弾薬を減らすということだ。

知り合いに弾薬を預けてドーム内にいてもらい、戦闘が終わった後に補充する、という手もあるにはあるが、あまり推奨される方法ではない。

ちなみに、ヴィントの発言に対して、シノンも無言で頷いていた。
「さて、と」
シノンがすっくと立ちあがり、３人から距離を取る。そして３人に、いやヴィントに視線を向けた。
「ヴィント」
「ん？」
「本大会で」
シノンがヴィントに放った言葉はそれだけ。
「ああ」
そしてヴィントも、それに対して一言だけを返した。
次いで、青い光の柱がドーム内にいる出場者たちをそれぞれ包み、一際輝いて中にいた出場者たちの姿を隠す。光が消えると、ドーム内にいた出場者たちは皆姿を消していた。

一部の例外を除いて。

「……なんでまだいるの」
「俺、1回戦ないから」
呆れたように呟いたシュピーゲルに、ヴィントが返す。
ＢｏＢ予選は人数制限がなく、エントリーしたプレイヤー全員が参加できる。人数が多かろうと少なかろうと、トーナメント形式に変更はない。そのため、人数が多ければ一部プレイヤーの試合回数を増やし、逆に少なければシードをシステムが作る。
今回は後者であり、ヴィントを含めた数名がいまだドーム内に残っていた。
「ほれ、シノンの応援と雄姿を見に来たんだろ。俺と話してる場合か」
「……ああ、うん」
いまいち納得しきれないシュピーゲルだったが、ヴィントの言う通りのため、大人しく中継モニターも見に行った。
「さて、と……」
ヴィント自身も、転送されるまでの時間潰しと、とある人物の観察のため、モニターに向かう。

名誉のために、レアアイテムを手に入れるために、強さを証明するために。様々な理由を持ったプレイヤーたちぶつかる一大イベント≪バレット・オブ・バレッツ≫。

【おまえ、本物、か】

そこで、キリト、シノン、そしてヴィントは、過去と対峙することになる。

ＧＧＯ　その７

ＢｏＢ予選を映す大画面パネル。その内の１つを、ヴィントが見つめる。そこでは、つい先ほど知り合ったプレイヤー、キリトの予選映像が映し出されていた。

最初はヴィントから見ても、これと言って特筆するところはなかった。シノンの話で、キリトがガンマンゲームの弾丸を避けられるのは知っていたが、ハンドガンの連射とライフルのフルオート射撃は全く違う。

自分に向かってくる予測線の多さに面食らったのだろう、キリトが一瞬動揺した顔を見せ、すぐさま退避。

数発被弾しながらもなんとか物陰に隠れるが、弾丸の雨によって身動きを封じられていた。だがその状況は長く続かなかった。別角度から攻撃しようとしたのだろう、相手は射撃を中断し、隠れながら移動を開始する。

狙いの場所にたどり着いたのか、再び姿を見せて攻撃しようとしたが、その場所をわかっていたかのように、その前にキリトが突撃。

だが距離があったために、相手はキリトに近づかれる前に射撃を行えた。

普通なら、キリトが蜂の巣にされて終了、となるだろう。だがしかし、キリトは弾丸

を光剣で斬り捨てるという離れ業を行った。
相手は目に見えて動揺するも、空になったマガジンの交換には淀みがない。そんな相手に対し、キリトがファイブセブンを向け、数発の弾丸を放つ。キリトが銃初心者なのに加え、走りながらの不安定な物だったが、距離が近くなっていたこともあって、銃を持っていた腕に命中。
そしてキリトは、疾走の勢いをそのままに、全力の直突きで光剣を相手に叩き込んだ。数秒の後、相手は無数のオブジェクト片と姿を変え、同時にキリトの勝利が確定した。
その様子を見ていたヴィントが目を見開いて驚愕し、同時に、わずかな動揺も宿っていた。
勝敗が決まったためだろう、キリトを映していた画面が別の戦闘を映す。同時にヴィントの身体を青い光の柱が包み、転送される。
入れ替わるようにキリトが待機エリアに戻って来た。シノンとヴィントがいるか周りを見渡すが、シュピーゲルがいまだパネルを見ていたことから戦闘中だと判断する。
ならば自分もと、パネルに向かって足を進めようとする。

そんなキリトの背後に、幽霊と見紛うような装いのプレイヤーが佇んでいた……。

一回戦を危なげなく勝利し、待機エリアに転送されたシノンがまず目にしたのは、ベンチシートに座って顔を俯けているキリトだった。

1日どころか半日にも満たない付き合いだが、転送前とはあまりに違いすぎる姿に面を食らった。

「……何うなだれてるのよ。そんなに強い相手だった？」

シノンの問いかけにもキリトは答えず、沈黙を貫く。いささかムッとしたシノンだが、そもそも答えるかどうかはキリトの自由だと、あっさり割り切った。

「まだ1回戦よ？　しっかりしなさい」

ポン、とキリトの肩を叩き、その場を去ろうとしたシノンだが、それはできなかった。キリトが突然、シノンの手を両手で包んできたからだ。

「ちょっと!?　何す……」

即座に叫び、腕を引き抜こうとしたシノンだが、その考えはすぐに霧散した。キリトの手が、いや、キリト自身が怯えるように小刻みに震えており、まるで自分に縋ってるように見えたからだ。

「……なにかあったの？」

シノンが膝を折り、下からキリトの顔を覗き込む。ようやく見えた顔には、深い深い恐怖が刻まれ、その眼はシノンに向いているはずなのに、シノンが映ってはいなかった。

再び声をかけようとしたシノンだが、その前にキリトの体が淡い光に包まれ、消え去った。

対戦相手が決定し、バトルフィールドに転送されたのだ。

「……なんだってのよ」

先ほどまでキリトが縋っていた手を見ながら、シノンは困惑した。先ほどのキリトの姿。それは、かつての自分をシノンに思い出させたからだ。

「……あの様子じゃあ、勝ち残るのは無理ね」

どんな事情があるにせよ、ＢｏＢは止まらない。対戦相手が手加減してくれることもない。ましてや、勝ち進めば進むほど、残るのは強豪たちなのだ。

それ以前に、すぐにでもログアウトしたほうがいいとすらシノンは思った。

そんなシノンの予想は、大きく裏切られた。

それは、常軌を逸した戦い方だった。シノンがキリトの剣を見たのは、ガンショップでの1度きり。それでも、今シノンが見ている戦いが、キリトの普段の戦い方ではないのはわかった。

弾道予測戦があるとはいえ、弾丸を剣で斬り防ぐのも驚愕だが、これはまだいい。だが、致命傷、または命中すれば動きに制限が出されるだろう弾丸のみを斬り捨て、それ以外のダメージを完全に無視し、そのまま相手に突撃して切り伏せる、まさに捨て身の特攻戦法。

そのあまりに荒々しいその戦い方に、キリトの対戦相手だけでなく、パネルを見ていたプレイヤー達も怯んでいた。

だが、シノンにはそのキリトの姿が、何かを振り払うように必死に逃げようとしているように見えた。

そしてもう1人、明らかにおかしな戦い方をしているプレイヤーが、シノンの見るパネルに映っていた。

「……どうしちゃったのよ、ヴィント」

ヴィントの対戦相手は『ギャレット』。テンガロンハットをトレードマークに、ウィンチェスターライフルを愛用するプレイヤーで、ＧＧＯでも実力者として、そしてそれ以上に洒落者として知られている。

だが、本来ならヴィントが手こずる相手ではない。本人のこだわりか、ギャレットはアンティークのレバーアクションタイプの銃を愛用しており、ＡＧＩ型と戦うのは苦手なのだ。

もちろん、本人にとって苦手なものが、他者にとって突ける隙であるとは限らない。だがヴィントであれば、その隙を隙として捉えられるのだ。

本来であれば。

「それは、あんたの戦い方じゃないでしょ……」

相手の弾幕を掻い潜り、近距離まで近づいて攻撃を叩き込む。過程に違いはあれど、それがヴィントの戦い方だ。

だが、映像の中のヴィントは明確に距離を保っていた。光弾の威力が半減以下になる距離には下がっていないが、頑ななまでにそこから先に踏み込もうとはしなかった。踏

み込もうとした瞬間、ヴィント自身が無理やり止めているようにも見えた。
ヴィントをよく知らない者は慎重になっている、と評するだろう。だが、シノンを含めた少数は、そう思わせる戦い方自体が異常だと考えていた。
パネルには、ギャレットが左手にもライフルを持ちだした場面が映っている。レバーアクションタイプは両手で弾丸の再装填を行うが、スピンコックという銃を1回転させて再装填させる特殊射法を使えば片手でも可能。
ただし、機関部に負担（ダメージ）を与えるため、基本的に使われない方法だ。また、両手が塞がるため、装填はできるが補充がしづらい、というデメリットもある（ヴィントも2丁持ちだが、光学銃は実弾銃に比べて弾数がはるかに多いため、補充の回数が少なく済む）。
それでも、ジリ貧の今の状況を覆すには、リスキーな賭けが必要とギャレットは判断したようだ。
同時に、または交互に、リズムを一定にすることなく両手のライフルを撃つギャレットだったが、その悉くをヴィントは躱す。
間もなくしてギャレットの攻勢が止み、ヴィントが反撃しようとした時、ギャレットは思いもよらない行動に出ていた。
ライフルを地面に落とし、両手を挙げていた。つまり降参の意思表示だ。ヴィントは警戒を緩めず銃を向け続けていたが、ギャレットは慌てることなく『リザイン！』と叫

んだ。

その後も、ＢｏＢ予選は進む。キリトもヴィントも戦い方が変わることなく、しかし確実に勝ち進み、シノンもまた危なげなく勝ち続けた。幸か不幸か、３人が待機エリアでかち合うことなく。

そして迎えたＦブロックの決勝、シノンとキリトの対決。

結果は、シノンの勝利。

程なくして両名が待機エリアに転送されてきた。しかし、勝利したはずのシノンの顔に笑顔はなく、キリトを見つけ出すと怒りを隠すことなく走り寄り、その胸倉を両手で掴んだ。

決勝のステージは≪大陸間高速道≫。１キロ四方の戦場こそ設定されているが、実際に移動できるのは中央を東西に貫く幅１００メートルのハイウェイのみというステージ。

路上に放置されているいくつかの自動車、墜落したヘリコプターなど隠れる場所もあるにはあるが、狙撃手にとっては好条件とは言えないステージ。

幸いにも2階建車両の大型バスを発見し、その2階部分でキリトを待ち伏せていたが、当のキリトは思いもよらない行動を取っていた。

剣も銃も抜かず、隠れることすらせず、ゆっくりと歩いていたのだ。その姿に激高しかけたシノンだが、深呼吸を繰り返して頭を冷やした。

そもそもシノンは、戦闘が終わって気を抜いていた上、さらに死角からの狙撃を避けてみせた男を知っている。

キリトもその類だろうと当たりを付け、普段と変わることない動作で狙撃を敢行。

バス前面の窓ガラスを粉々に砕きながら放たれたヘカートの弾丸は、キリトの胸部に直撃、上半身を吹き飛ばした。

勝利が確定したにも関わらず、シノンは呆然としていた。だがすぐに、奥歯を噛み締めた。

さきほどシノン自身が切って捨てた可能性。それこそが正解だったのだと気づいたからだ。

キリトは避ける気が無かったのだ、と。

「……どういうつもり？」

静かにキリトに問いかけるシノン。怒りが収まっているわけではない、だが恐怖に震えるキリトを見ていたからか、かろうじて感情を爆発させなかった。

「……俺の目的は、明日の本選に出ることだ。もう、この予選で戦う理由はなかった」

それも、キリトの言葉を聞くまでだった。右手を放し、その手を大きく振りかぶり、躊躇いなくキリトの左頬に掌を炸裂させた。

「……あんた言ったわよね？　決勝で会っても全力で戦うって。その全力がこれ!?　ふざけるのも大概にしなさいよ!!!」

頬をぶたれても、キリトは碌に反応を示さない。その様が、ますますシノンの癇に触った。

「所詮ゲームになにをそんなに熱くなってるって言いたいの？　ええ、そうね。たかがＶＲゲームのたかがワンマッチ、しかも本大会出場が決まってる消化試合も同然。けどね！　目的は違くても、誰だって真剣に戦ってるのよ！　今！　ここで！　この世界で!!!　あんたは違うの!!?」

その言葉を聞いたキリトが、目を見開き、続けてきつく閉じられ、しばらくした後に、開かれた両目が正面からシノンを見た。

「すまない。俺が間違っていた。……俺は、本選で確かめなきゃいけない事がある。

だから、それが終わった後に、俺に償いの機会をくれないか？」
「償い？」
「本気で、君と戦う」
「……それを信じろって？　１度蔑ろにされてるのに？」
「信じてもらうしかない。俺には、保証する手段がないから。それに、君の言葉で思い出した」
「なにを？」
「……全力を尽くさなきゃ、この世界で生きる意味も資格もない、って事」
　キリトがその眼をシノンに真っ直ぐに向け、シノンもまたキリトの眼を見返す。５秒、１０秒と経ち、視界の端に転送の光を認めながら、シノンはゆっくりとキリトから手を放す。
「……これ以上、失望させないようにするのね」
　理解も納得もできたわけではないだろう。だがシノンは、矛を収める選択を選んだ。
「すまない。ありがとう」
「謝罪も感謝もいらないわ。あんたがすべきなのは有言実行。それだけよ」
　キリトから身体を背け、シノンがウインドウを開く。映った予選トーナメント表を確認し、いまだヴィントの決勝戦が終了していないことを確認すると、シノンは中継モニ

ターに足を進め、ヴィントの姿を探す。
「……なに？」
「いや、あの、俺も偵察ぐらいはしようかなって……」
その隣に、キリトが陣取っているが。
「あんた、面の皮厚いって言われない？」
呆れと共に吐かれたシノンの言葉に、キリトは困ったように頬を掻く。
その後方で、声を掛けることができなかったシュピーゲルが、２人の背中を見ていた。

「……全力を尽くさなきゃ、この世界に生きる意味も資格もない、か」
暗闇の中に六角形パネルと小さなホロウインドウが浮かんでいるだけの空間。バトルフィールドに転送されるまでの１分間、各プレイヤーはここで準備の最終確認を行う。
そのパネルの上で、ヴィントは先ほどキリトが言った言葉を反芻していた。シノンとキリトは互いしか見えていなかったために気づいていなかったが、ヴィントもあの場にいたのだ。
そして会話が終わる直前に対戦相手が決定し、転送されたのだ。

「……お前は、やっぱり『お前』か、キリト」

何かを確かめたような口ぶりと共に、ヴィントが青い光と共にその空間から消えた。

ヴィントの決勝の相手は『夏侯惇』。古代中国の隻眼の武将と同じ名前のそのプレイヤーは、右目に眼帯型の照準補正デバイスを、防弾ヘルメットやアーマーもそれ風にカスタマイズされており、銃ではなく剣や槍のほうが似合うのでは、という風貌だ。

第２回ＢｏＢでも本大会出場を果たした猛者でもある。

夏侯惇もヴィントの名前は知っていた。聞いていた戦い方と違ってはいたが、ＢｏＢに合わせて変えたのだろう程度に考えていた。が

「うっそぐほっ!!?」

ヴィントが壁も天井も関係ないとばかりに、時に駆け、時に跳び、縦横無尽に空間を移動しながら接近。至近距離からの銃撃もすり抜けるように躱され、勢いそのままに、カスタムされた双銃でぶん殴られた。

驚愕と衝撃でおかしなうめき声を上げながらノックバックする夏侯惇だが、ヴィントは即座に再突撃。夏侯惇のアーマーの隙間に銃を押し付け、そのまま連射。今度は声を上げる間もなく、夏侯惇はオブジェクト片へと姿を変えた。

「……遅いのよ、まったく」
見敵から数分とかからず決着した決勝戦を見て、シノンが安心と呆れを含めて呟く。シノンも数回しか見たことがない打撃まで晒したのはやりすぎでは、とも思ったが、戦い方が戻ったので良しとした。
「で、あんたは何か収穫あった？」
続けて、隣で観戦していたキリトに感想を聞こうとシノンは視線を向ける。
「え、あ、ああ……」
それに対したキリトの反応は、煮え切らない態度だった。何を言おうか迷っている、いや、自分の考え自体が纏まっていないのかもしれない。
「……悪いシノン。俺、落ちる」
「は？」
唐突にキリトはログアウト操作を実行し、そのままＧＧＯから消えた。それから間もなく、決勝戦を終えたヴィントが待機エリアに転送されてきた。
「おかえり。ずいぶんスロースタートだったわね？」
「……まあ、な」

皮肉も込めたシノンの言葉に、ヴィントはこれと言って反論しなかった。そのままキョロキョロと辺りを見渡し、誰かを探す。
「……キリトは？」
「あんたの戦い見終わったら、さっさとログアウトしちゃったわ」
「そっか」
目当ての人物がいないことに、ヴィントはホッとしたような、残念なような、複雑な態度を見せた。
「……あんた、今日はもう落ちたほうがいいわよ」
「ん？」
「ん？　じゃないわよ。何かあったんでしょ？　予選も終わりだから、大人しく戻って整理しなさい」
シノンの言葉にヴィントも思考するが、答えはすぐに出た。
「悪い、そうさせてもらう」
「謝罪はいいわよ。ほら早く」
ログアウトするまで見張るつもりなのか、シノンがヴィントから視線を外そうとしない。それに苦笑しながら、ヴィントは操作を実行、先ほどのキリト同様、ＧＧＯから姿を消した。

「まったく……」

呆れと、それ以上に心配を滲ませたシノンが、続けてログアウト操作を行う。

「あ、シノ『ごめんなさいシュピーゲル、またあとで』……ぁ」

シノンが１人になったことで、ようやく話しかけることができたシュピーゲルだったが、シノンはその言葉を遮り、早々にログアウトしてしまった。

伸ばしかけた腕を力なく下ろしたシュピーゲル。だがしかし、抑えこもうとした感情が漏れ出したかのように、その手は、拳へと形を変えていた。

ＧＧＯ　その８

ＧＧＯからログアウトし、詩乃が照明の消えた暗い部屋で目を覚ます。着けていたアミュスフィアを外し、傍に置いてあった携帯端末を取り、電話を掛ける。

数度の呼び出しの後、相手が電話に応えた。

『……もしもし』

「大丈夫？」

話しながら眼鏡を掛け、ベッドから立ち上がり部屋の照明を点ける。

『悪い、心配かけた』

「そんなのはいいわよ」

相手から謝罪の言葉が届くが、詩乃は気付いている。相手は、自分の質問に答えていないと。

誤魔化そうとしたのかはわからないが、予想よりも堪えているらしい。

「今からそっち行こうか？」

『……気持ちだけ受け取っとく。明日の本大会に備えるべきだろ。俺なんかに構ってる場合か』

「……ん、わかった」
じゃあな、と一方的に相手は電話を切った。
「……俺なんか、ね」
一言呟いた詩乃が端末を机に置き、ハンガーラックから衣装を取っていく。外出用の服装に着替え、靴を履き、外に出て部屋の鍵を掛けた。
それから徒歩で１０分もせず、詩乃は目的のアパートに到着。詩乃が住んでいるアパートと違い、年季が入っている建物だ。
その一室に視線を向けた詩乃だが、住人不在なのか電気が点いていない。が、詩乃は構わずその部屋に向かい、扉の呼び鈴を鳴らす。
「……」
数秒ほど待つが、部屋から音はしない。詩乃は再度、呼び鈴を鳴らす。再び数秒待つが、それでも動きはない。３度、４度と繰り返すと、ガチャリと解錠の音が響く。焦るように扉が開かれ、中から高校生ほどの男が１人出てきた。
「おま、なん『こんばんは、先輩』え？　あ、こん、ばんは……」
「上がっていいですか？」
「……あ、ああ」
戸惑っている部屋の主の言葉を遮り、挨拶をする詩乃。そのまま許可を取ると、家の

中へと入る。
「いや待て、ちょっと待て」
「はい？」
が、我に返った家主にすぐに呼び止められた。
「年頃の女の子が、1人暮らしの男の部屋に夜1人で訪ねてくるとか不用心過ぎるだろ」
「そうね、確かに。ごめんなさい」
男の指摘に、詩乃が反論もせず頭を下げる。
「けど、来たことは間違いじゃなかったわ」
「なに？」
「だって、いつもの先輩なら私を家に上げるはずないもの」
玄関で会っても、そのまま私を家まで送ってた、と詩乃は言う。
「……そう、か？」
「そう」
「……そうか」
男は自分の行動に呆れ、額に手を置いて天を仰ぐ。あー……、と零しながら男が何かを考えている。少しの間それを続けた後、男は顔を詩乃に向け、言い放つ。
「……夕飯、食べてくか？」

出された座布団に座り、食後のお茶で喉を潤しながら、詩乃は台所で洗い物をしている男を見る。予定ではなかった２人分の夕飯を最初は確かめるように、しかしすぐに手慣れた様子で調理していた。

食卓に並べるときに

「自分以外に作ったのは久しぶりだ」

と、言っていたので、元々料理をするタイプだったのだろう。食べたことがある人間が他にもいるのかと詩乃は考えたが、すぐに家族だと思い至った。そのままご馳走になり、洗い物ぐらいは、と申し出るもあっさり断られ、結果、詩乃は男を見ることに専念している。

男はそれに気づいていながらも気にすることなく、手を動かし続けた。

「……お待たせ。朝田、送ってく」

洗い物を終えた男が、詩乃に帰りを促す。詩乃もそれに反対することなく、帰り支度を始めた。

詩乃のアパートへの帰宅中、男と詩乃の間に会話はなく、黙々と歩き続ける。
「……俺と」
だが、道半ばほどで、男は口を開く。詩乃に視線を向けず、足も止めないまま。
「俺とキリトの関係は、たぶん、『戦友』、だと思う」
正確には『だった』だけど、と、男は言う。
「戦友……それじゃあ、あいつも？」
詩乃の問いに、男はコクリと頷いた。
「けど、それならなんで」
「……あいつ自身が理由じゃない。あいつに感謝こそすれ、嫌う理由も憎む理由も俺にはない」
話している間、男は無表情を貫いている。しかし、言葉に嘘はなく、悪感情も含んでいないことは詩乃にもわかった。
「けどあいつは、間違いなくアレを象徴する1人なんだ。少なくとも、俺にとっては」
「あいつ等と会わないようにした。あの鉄の城に関わろうとしなかった。逃げてるって自覚はある」

「最初は名前が同じだけだと思った。けど予選映像を見て、キリトがアイツって考えが浮かんだだけで、ああなるとは俺も思わなかった」

「お前のせいで大勢死んだって、そんな声がまた聞こえた気がしたよ」

「……先輩は、キリトがそう思ってるって考えてるの？」

「……そういう奴じゃないと思ってる。けど、違うとも言い切れないんだよ、俺は……」

男は再び口を閉ざす。詩乃もそれに対し何も言わず、黙々と歩き続ける。数分の後、詩乃のアパートに。男はその前で立ち止まり、詩乃が前へと歩き進める。

「ありがとう、先輩」

「ああ。次はＧＧＯで」

「ええ」

詩乃が振り返り、男に礼を言う。男が簡素に返し、それを受けて詩乃も自分の部屋へと向かう。

「朝田」

その前に、詩乃は男に呼び止められ、再度振り向く。

「ありがとな、来てくれて」
「……別に。本調子じゃない先輩に勝ったって、なんの意味もないもの」
「それでも、ありがとう」
　男の言葉に一瞬面食らった詩乃だったが、すぐに単純な善意ではないと言う。それに対し、男はやはり感謝で返した。
「まあ、受け取っておくわ。それじゃあまたね、先輩」
「ああ」
　今度は男も引き留めることなく、詩乃はアパートに歩いていく。自分の部屋の鍵を開けたと同時に、アパート前にいる男を見る。詩乃がペコリと頭を下げ、男が手を上げると同時に踵を返し、帰路に就いた。
　男が少し離れたところで詩乃も部屋に入る。電灯も暖房も止めて行ったために暗く、外ほどではないが冷たい。先ほどまでいた男の部屋との差を、嫌でも感じさせた。
　直ぐに灯りを点け、暖房を動かし、外套だけ脱いでベッドに座った。
「あの様子だったら、大丈夫かな」
　詩乃がさっきまで会っていた男を思い浮かべ、とりあえず安堵した。訪ねて部屋から出てきた時はお世辞にも顔色がいいとは言えなかったが、食事を終えた時点で大分マシになっていた。

溜め込んでいたものを吐き出したことも、プラスに働いたはずだ。
「……あれ？　私、とんでもないことしてない？」
同時に、詩乃は自分の行動を振り返った。以前、詩乃は恭二を家に招いて夕飯をご馳走したことがある。それ自体は楽しかったのだが、そのあと恭二の目に熱が籠っていって冷や汗を掻いたのだ。
『招いた』と『赴いた』の違いはあるが、さっきのは正にそれと同じ状況なわけだ。男が『不用心』と言って、詩乃はあっさりと返していたが、それこそそっち方面に流れる可能性もあった。いや、自発的に行った分、男がそう考えるのも十分ありえた。
「……ない、ないないない。先輩は『相棒』だから心配しただけで、私はそんな感情持って」
詩乃が自身の行動に言い訳している時、突然音楽が鳴った。
「ひゃわっ!?　え、あっ、電話？」
不意を突かれた詩乃が小さく悲鳴を上げるも、着信音だと気づく。慌てて端末を取り、表示される名前を確認した。
「新川くん？」
そこに表示されていたのは、友人の名前だった。何の用だろうと思った詩乃だったが、ＧＧＯでシュピーゲルの行動を強引に遮ってログアウトしたことを思い出し、なか

なかに気まずかった。

なぜこのタイミングなのかと気にもなったが、まずは電話に出ることにした。

「もしもし」

『あ、朝田さん、ちょっといいかな？』

「大丈夫。どうしたの？」

『明日、ちょっと会えないかな。本大会の前に』

恭二からの要望に、詩乃は思案する。本大会は午後８時、学校の課題も今日中に終えられる。ＧＧＯにも、ＢｏＢ以外でログイン予定はない。先輩とも、『次はＧＧＯ』と念を押されたので、会う予定はない。

「うん、大丈夫。時間は？　どこで会う？」

『それじゃあ……』

そしてこれが、見えなかった溝を浮き上がらせる切欠となった。

ＢｏＢ本大会２時間前。詩乃がシノンとなってＧＧＯにログインした。すでに陽が落ちているリアル同様、ＧＧＯも夜となっており、グロッケンの街が人工の光で煌めいている。

「……」

しかし、シノンはそんな光景に心動かされることは無い。すでに見慣れているのもあるが、ＢｏＢへの緊張感と、少し前の友人との一件が尾を引いていたからだ。

「あ、シノン……」

そんなシノンに、すでにＧＧＯにログインして待っていたのだろうシュピーゲルが声を掛けた。

「……」

シノンはそれを意図的に無視し、シュピーゲルの横を素通りしようとする。が、その前にシュピーゲルはシノンの腕を掴み、それを阻止した。

「……放して」

そんなシュピーゲルに対し、シノンは冷たく突き放す。明らかに友人に対する態度ではなく、普段のシノンでは考えられない物だ。相手が、先ほどシノン／詩乃の感情を逆撫でした当人であるシュピーゲル／新川でなければ、だが。

「朝田さん」

とんでもないマナー違反に、さすがのシノンも仰天した。シュピーゲルがアバター名ではなく本名で呼んできたことを咎めようとしたシノンだが、それだけ必死なのだろうと無理矢理自分を抑えた。

なにより、友人を敵視し続けるのは、シノンとしても本意ではない。

「なに？」

「その、さっきはできなかった大事な話があるんだ。大会が終わった後に、リアルで会えないかな」

「……いいよ。大会が終わったらね」

「ほ、本当っ!!?」

断られることも考えの内に入っていたのだろう。シュピーゲルが驚きと歓喜の混じった声を上げた。

「こんなことで嘘つかないよ。じゃあ、今度こそ放してくれる？」

「あ、ご、ごめん」

シノンの指摘に、シュピーゲルが素直に手を放した。

「……大会、頑張って」

「うん」

一言に収めたシュピーゲルからの激励を受け、シノンがコクリと頷き、総督府へと歩

みを進める。
　総督府前の広場では、無数のプレイヤーが飲み物食べ物を片手に騒いでいる。ＢｏＢの観戦前にも関わらずの大盛り上がりの理由は、ＢｏＢ本大会を対象とした運営公式のトトカルチョの為だ。
　一説では、このトトカルチョでＧＧＯ内に存在する通貨の半分以上が飛び交っているというのだから凄まじいものである。
　そんな広場を無視し、総督府前の階段を上るシノン。そして上りきったところで。
「シノン」
　シノンは、キリトと邂逅した。
「キリト。待ち合わせ？」
「いや、シノンを待ってたんだ。ここにいれば確実だろ？」
　微妙にドヤッてると言えなくもないキリトに、シノンが内心でイラッとした。
「はいはい。で、なんで私を待ってたの？」
「訊きたいことがあるんだ」
「……なに？　まさか、今度は本大会のルール説明させようってんじゃないでしょうね」
「ち、違う違う！　今回はちゃんと覚えてきたって！　いやルール確認したい気はあるけど、訊きたいのは別のことだ」

ジト目で見てくるシノンに対し、キリトが慌てて弁明する。
「……酒場ゾーンなら開いてるわ。エントリーして、そこへ行きましょ。ついでに、本題の前にルールも聞いてあげるわ」
待機エリアはイベント開始の1時間前でなければ立ち入ることができない。それに対し、総督府地下1階の酒場ゾーンは常時解放されている。酒場自体はグロッケンの至る所にあるので、わざわざ総督府に足を運ぶ者は普段ならそういないのだが。
「今日に限っては、酒場ゾーンも大賑わいね」
闇風をはじめとした強豪をプレイヤー達が激励し、ダインといったスコードロン所属プレイヤーがトトカルチョは自分に賭けろと自信満々にメンバーに勧め、ゾーンの一角でそのトトカルチョにプレイヤー達が熱気を発していた。人数の関係で広場ほどではないが、それでも相当なものである。
ランキングを見れば、シノンは15位、キリトは大きく下がって27位となっている。それに対し、ヴィントは6位。初出場ではあるが、前回優勝者の闇風が決着を付けると宣言したこともあり、かなり上位となっている。
「ふん……」
シノンがそれを見て不機嫌そうに鼻を鳴らす。相棒として誇らしくはあるが、自分の方が下と見られているのはやはり気持ちの良いものではないのだ。

「ルールに関してはこれで終わり。それで、あんたが本当に訊きたいことって？」
適当な席に座り、キリトのルール確認に捕捉を加えながら付き合ったシノンの質問に対し、キリトはウィンドウを開き、シノンに見せる。それは、本大会出場者のリストだった。
「この中に、シノンが知らない名前は幾つある？」
「……なんでそんなこと訊くのよ」
「大事なことなんだ、頼む」
訝し気なシノンに対し、キリトは真剣な表情を見せる。言葉にも、焦りが滲み出ているように感じる。
「……それは、昨日の予選で、急にあんたの様子がおかしくなった事と関係あるの？」
「……ああ、そうだ」
予選１回戦を終えたキリトは、かつて同じＶＲＭＭＯをプレイしていたプレイヤーに声を掛けられたらしい。
だが、決して友人や仲間ではない。その真逆、本気で殺し合った敵だった、と。ゲー

ムであるにもかかわらず、本当に命を懸けて。
　そのプレイヤーが所属していた組織は決して許されないことをし、そして和解もあり得なかった為に、剣で決着をつけるしかなかったのだと。
「そのことを後悔はしていない。……でも俺は、負うべき責任から眼を逸らし続けてきた。自分の行いの意味を考えようともせず、無理矢理に忘れて、今日まで来てしまった……」
　シノンへの説明ではあるが、キリトはむしろ自らへと言い聞かせるように言葉を紡ぐ。
「だから、もう逃げることは許されない。今度こそ、正面から向き合わなきゃいけないんだ」
「……そう」
　何かを言おうとしたシノンだったが、それを飲み込み、改めて本大会出場者のリストに目を通す。
「それなりの強者ならＧＧＯで名前が知れてくるし、ＢｏＢも３回目だから出場者は決まってくるわ。その上で、私が名前も知らなかったのは、あんたを除けば『ペイルライダー』と……『スティーブン』、でいいのかな？　この２人」
　ＧＧＯでは日本語で名前を付けることもできるが、この２人はアルファベット表記

だ。だが、シノンはペイルライダーの名前はすんなり読めたが、逆にスティーブンはぎこちなかった。

それを聞いたキリトは、２つの名前を口の中で繰り返す。それを見たシノンが口を開こうとした時。

「何してるんだ？」

知った声が、２人の耳に届いた。声の方向に視線を向けると、案の定、そこに立っていたのはヴィントだった。ヴィントを見たキリトがビクリと肩を跳ね上げ、そのすぐ後に安堵していたのはシノンもヴィントも気づいていたが、何も口にすることはなかった。

「ヴィント。なんでここに？」

「時間潰し。カスタムもそこまで時間要らないし、狩りにでも出てうっかり死にでもしたら目も当てられないからな。そろそろ下に行こうとしたらお前らが見えた。で、何してたんだ？」

「私が知らない名前があるかって訊いてきたのよ、こいつ」

「知らない名前？」

シノンがリストをヴィントに見せ、２つの名前を指差した。

「……『ステルベン』か。ずいぶん直球な名前にしたもんだ。まあ、そういう意味じゃ『ペ

イルライダー』もか」
　そしてリストを見たヴィントが口にした名前は、シノンが発した物とは違っていた。
「ステルベン？　それスティーブンじゃないの？」
「意図してこのスペルだったらな。ドイツ語なんだよ、これ」
　今表示されているスペルは『Ｓｔｅｒｂｅｎ』。スティーブンであれば『Ｓｔｅｖｅｎ』のはずなのだ。
「それで、そのステルベンはどういう意味なんだ？」
　キリトがヴィントに対し、急かす様に問う。それに対し、ヴィントは淡々と答える。
「命が消えるってこと。『死』だよ」
　その返答に、キリトとシノンが息を呑んだ。本来のシノンであれば、その名前に意見の１つでもしたかもしれないが、キリトの話の後だった為に、そのような気は起きなかった。
「……それじゃあ、ペイルライダーは？　似たような意味があるみたいに言ったけど」
「ペイルライダーは黙示碌に出てくる『【死】を司る騎士』の名前だ。俺の記憶違いでなければ、だけどな」
「騎士……」
　ヴィントの返答に、キリトが再び考え込む。

「……キリト」
「え？」
そんな様子のキリトに、ヴィントが躊躇いがちに声を掛ける。だが、そのあとに言葉が続くことは無く、酒場の喧騒だけが響く。
「……悪い、なんでもない。２人とも、俺は先に降りてる」
シノンとキリトの返答を聞くことなく、ヴィントは酒場ゾーンのエレベーターに足を進める。
「……なにしてんだ、俺」
後悔と自身の情けなさが滲んだ一言を呟きながら、ヴィントは酒場ゾーンから姿を消した。

『硝煙の匂いが大好きなバトルジャンキー達！　準備はい～い？　ＶＲＭＭＯで最もハードな【ＧＧＯ】最強プレイヤーが、今夜決定～～～～!!!　ＭＭＯストリームは完全生中継で、戦いの模様をお送りするよ～♪』
グロッケンに無数に展開されたパネルの中で、司会進行役の猫耳少女がマイクを通し

て視聴者を煽るように声を上げる。そしてそれに応えるように、パネル前のプレイヤー達が歓声と共に盛り上がりを見せる。

『さ～あ、カウントダウン！　いくよ～～！』

開始まで１０秒を切り、少女のカウントダウンが始まる。

『５……４……』

外の喧騒とは正反対に、待機エリアのプレイヤー達は例外なく静かだった。目を閉じている者、他者に視線を向ける物、パネルに映っている観衆を見る者と様々だが、誰も言葉どころか物音も発しようとはしない。

『３……２……』

各々が思い浮かべるのは強敵との戦い方か、信じて疑わない自らの勝利の栄光か、はたまた過去と向き合う覚悟か。

『１……』

そして、待機エリアの全プレイヤーが光に包まれる。

『Ｂ　ｏ　Ｂ……スタート!!!!』（バレット・オブ・バレッツ）

少女の宣言とグロッケンで大量に上がった花火と共に、ＢｏＢ本大会が幕を開けた。